



『古文尚書』の真本を求めて : 章炳麟、最後の探究

緒形, 康

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 50:49-117

(Issue Date)

2023

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481154>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481154>



『古文尚書』の真本を求めて——章炳麟、最後の探究

緒形 康

一 『尚書』は読み難いか

最後の国学大師、章炳麟の遺作は『古文尚書拾遺定本』であつた。¹ 春秋左氏伝の研究で名声を博し、その古文学派の立場から、康有為や梁啓超に代表される今文学派と激しい論戦を繰り広げた彼の前歴を知る者には、この事実は意外の感を与える。実際、彼は一九三二年七月に書いた『古文尚書拾遺』の「後序」で、自分の『尚書』研究を振り返って、こう述べている。

六経の精神は帰着するところ同じであるが、『尚書』のみは残欠甚だしく読み難い。古文は『爾雅』に即して読めと言われたものだが、いざ読むとなると疑問百出で、うまくゆかない。後の学説では、高郵（揚州）の王引之が

「裕」を「道」と訓じ、瑞安（温州）の孫詒讓が「棊諶」と「棊彝」の「棊」を「匪」と訓じたのは、それぞれ典拠があり、適切な解答であったが、それ以外は皮相の考えに過ぎない。私は『尚書』は読めないと初めは思っていたので、深く研究しなかった。だが、弟子である歙県の呉承仕だけは古文を好み、敦煌から発掘された『堯典』を使って解読したところ、孔安国『伝』が隸古文字で書かれたのではないかと推定した。次いで、日本の足利学校所蔵の版本で文字の校合を行い、前漢の孔壁書は亡失したが、東晋の梅賾が献上した『古文尚書』と大差ないと考え、私にその成否を質した。私はこの考えを是とした。その後、洛陽から三体石経の残碑が出土し、古文の真跡が発見された。梅賾『古文尚書』の『堯典』と校合すれば、一々対応する。世の知識人が『古文尚書』を信じたのは、根拠がなかったわけではないことが判ったが、惜しむらくは、清朝時代の段玉裁や孫詒讓の諸氏がそれを研究できなかったことである。だが、『古文尚書』をこの三体石経の文字で通訓するまでには行かなかった。民国二十一（一九三二）年の夏、北平から上海に戻り、盛夏の折、余暇を得たので、棘下生や孔安国の緒言を読み返し、司馬遷の『史記』に記されたものについて、何度も相互に参照しながら精読し、判った結果を簡条書きにして、『太史公古文尚書説』一卷をまとめた。それから、私見により校訂を加え、その故言を通覧して、旧書の典麗な記事から往時の史実を確認して、『古文尚書拾遺』二巻を作った。多少の発見はあったと思うが、その成果の程は分からぬ。欠陥も多いことだろう。これを呉承仕に委ね、今後その誤りを正されんことを請う。かつて鄭玄は未完の『左伝』注を全て服虔に残した。私は鄭玄に倣うものではない。けれども、呉承仕の古代字への精進は服虔に比肩するものがある以上、その心積りをして不都合はないだろう。本年七月、章炳麟序。〔11：854-855〕

若き日の章炳麟は『尚書』は読めないものと思つて敬遠した。だが、一九二二年に『三体石經』が洛陽から出土して以後、考えが変わつた。この碑石に刻まれた古文は魏の時代のもので、『古文尚書』が東晋の朝廷に献上された時期と重なる。『三体石經』を手掛かりに『尚書』を読む道が開けたのである。しかし、この章炳麟の述懐は事実と必ずしも合致しない。『膏蘭室札記』は、光緒十七（一八九一）年から十九（一八九三）年まで、兪樾が山長を務める詒經精舎で学んだときに作つた読書札記である。全四百七十四条のうち、『尚書』に関する読書記録は七条と確かに多くない。しかし、一九三三年に述懐したように、若き日の章炳麟は『尚書』を読めないものとは必ずしも考えていない。その第二百九十七条「光宅天下」（『書序』）の短い考察は、清朝考証学の成果を駆使した野心的な『尚書』読解であり、彼の『尚書』研究のその後の方向性を決定付けたものである。

二 「光宅天下」の解釈

『膏蘭室札記』第二百九十七条「光宅天下」（『書序』）の考証は次の通りである。

『書大序』に「昔在堯舜、聰明文思、光宅天下」とある。（章炳麟按。「光宅天下」は、『堯典』の「光被四表、格于上下」と通ずる。『堯典』の「光」は「横」の仮借文字であり、『書大序』の「光」もやはり「横」である。『書大序』の「宅」は、『堯典』の「格」に通じ、古音では「宅」と「格」が同じ音韻の部に属する。（つまり、「光宅」とは「横格」（「広く至る」）であつて、）『堯典』の「四表」と「上下」を併せると六方となるから、「光宅天下」とは、

「天下」の全てを遍く包んでいるという意味である。孔穎達くようたつの『尚書正義』が「徳が充満して天下に留まとどまっている」と解したのは誤っている。〔1: 144〕

章炳麟は、『書大序』の十二字を読むさい、『堯典』の八字を参照した。『堯典』の解釈史上、このように考えた者はいない。ただし、『堯典』八字の解釈は、清朝考証学の泰斗である戴震の考え方に依っている。乾隆乙亥（一七五五年）の「王鳳喈かに与える書」は、『堯典』の「光」を「横」の仮借文字とする戴震の考証を詳しく説いている。二十世紀になって、胡適は、中国の歴史学に科学精神を導入することを訴えるに当たり、「大胆な仮説と細心の考証」の最良の例として、戴震の「光被四表」の考証を取り上げたことがある。その考証の流れは以下のようなものだった。

- (1) 孔安国『伝』は、「光」を「充」と訓ずる。陸徳明『經典釈文』によれば、その音は「無音の切」である。孔穎達『尚書正義』が、「光」を「充」と訓ずるのは、『爾雅・釈言』に基づいた読みだと説明している。その『爾雅・釈言』は「光」を「枕」に作り、孫炎本『爾雅』は「枕」を「光」に作る。音は「古黄の反」である。『堯典』の二句を初めて解説した孔安国『伝』が「光」を「充」と訓じたのは、『爾雅・釈言』に拠ったものであることが分かる。
- (2) 孔安国『伝』は、魏晋に出た偽書である。だが、『爾雅』に基づくその読みは古人の文法に従っており、魏晋の人の手になるとは考えられない。
- (3) 宋代に蔡沈が書いた『書集伝』が、「光」を「顕」と訓ずるのは、『爾雅』や古注を踏まえない点で誤っている。
- (4) ところが、『尚書』を含め、『六経』には、『爾雅』に記す「枕」が一つも使われていない。

(5) 一方、許慎の『説文解字』は「枕」を「充」と訓じ、宋の徐鉉が注釈した『説文』に、その音が「古曠の反」とある。また、『礼記・楽記』の「号以立横、横以立武」の鄭玄『注』は、「横」を「充」と訓じ、気が充滿すると説く。『經典釈文・礼記音義』によれば、この「横」は「枕」と同じく、「古曠の反」である。さらに『礼記・孔子閒居』の「夫民之父母乎、以横於天下」の鄭玄『注』も、「横」を「充」と訓ずる。

(6) 以上の『説文解字』、『礼記・楽記』、『礼記・孔子閒居』の三例から、漢代の人々は、「枕」と「横」を、「充」と同じ意味に解し、「古曠の反」という同じ音で読んだことが分かる。だから、漢代に存在したはずの『堯典』古本は、「光被四表」を「横被四表」と書いていたはずである。

(7) 「光被四表」が「横被四表」であるのは、「光被四表、格于上下」という二句の構文からも証明できる。『礼記』が「横於天下」と書くように、「横被」は「横於」であり、「広被」と同義で、「被」は前置詞である。「横四表」と「格上下」は対句を構成し、広く及ぶことを「横」と言い、深く貫くことを「格」と言う。「四表」が「被」を受けるのは、徳が民物に加わることを指し、「上下」が「于」を受けるのは、徳が天地に及ぶことを指す。このように、「横」と「格」、「被」と「于」は、それぞれ句法と意味がぴったりと呼応しているのである。

(8) ここから『堯典』二句の古本より現行本への推移を辿れば、古本の「横」が「枕」に転写され、「枕」の部首が脱落して「光」になったと見て良い。『爾雅・釈言』が「光」の音を「無音の切」としたのは適切ではなく、正しくは「古曠の反」とすべきであろう³。

章炳麟は、戴震による以上の考証に基づき、『堯典』にある「光」を「横」の仮借文字とした。そして、『書大序』

の「光宅天下」という一句が、『堯典』の「光被四表、格于上下」を踏まえたものだという新説を出した。ところで、『書大序』は、それまでの伝統學術の世界で異論の多い書物である。閻若璩えんじやくきよという清初の学者は、東晋の梅賾が献上した『古文尚書』（それまで国家公認のテキストであった『今文尚書』より二十五篇多かった）と、その『古文尚書』に付された孔安国『伝』を、偽書として退けたが、閻若璩が偽書としたのは、他にもあり、『書大序』はその一つだった。閻若璩は戴震より一世紀ほど前に活躍した考証学者で、『尚書今古文疏證』という名高い書物の作者である。

梅賾の『古文尚書』は、古文で書かれ、前漢の時代に魯の恭王が孔子旧宅の壁から発見した後、行方不明になった『古文尚書』を忠実に再現した書物と信じられてきた。梅賾の『古文尚書』は晚出書、孔子旧宅の壁から出た『古文尚書』は孔壁書と呼ばれる。朱子学の創始者である朱熹が、この晚出書の『大禹謨』にある「人心惟危、道心惟微」という十六字（いわゆる「虞廷十六字」）に依拠して、朱子学という壮大な理論体系を編み出した。閻若璩は、晚出書を偽書と断じた考証の中で、『大禹謨』の「虞廷十六字」が、荀子以後の学者の偽造に成ることを暴いた。朱子学を構成する重要な論拠の一つがこうして崩れ去ったと言われる。梁啓超『中国近三百年學術史』（一九二六年）⁴以来の思想史の通説は、閻若璩の書物が、朱子学の抑圧的な倫理体系を打ち碎き、近代的思想の誕生へと道を開いたと説く。章炳麟は、この通説を準備した閻若璩の学説に異議を唱えたのである。

『書大序』は、閻若璩が断じたような後世の偽書ではないと、章炳麟は考えた。なぜなら、『書大序』の思想や表現は、『古文尚書』の真本である『堯典』と内的な関連を有するからである。『書大序』にある「昔在堯舜、聰明文思、光宅天下」の内、「光宅天下」の四字は、『堯典』の「光被四表、格于上下」という八字を要約したものである。戴震は、「光被四表」に始まる『堯典』八字が、元來は「横被四表、格于上下」と書かれていたと考えた。『書大序』の

「光宅天下」は、この「横被四表、格于上下」を、さらに次のように変型した。まず、「横被」（広く及ぶ）と「格于」（深く貫く）が「光宅」へと縮められる。次いで、「四表」と「上下」が「天下」に縮められた。「四表」と「上下」を併せれば、「六方」となって、この世の森羅万象を網羅するものとなる。堯舜という古代皇帝の知恵や活動（聰明文思）は、森羅万象を広く、深く包含しているさまを表現したものである。

三 清朝考証学の「科学精神」

清朝考証学は黄宗羲と顧炎武を開祖とし、閻若璩、胡渭がその基礎を築き、惠士奇と惠棟の父子、その学生である王鳴盛、錢大昕、江藩から成る吳派（江蘇派）と、戴震とその後学である段玉裁、王念孫、王引之父子から成る皖派（安徽派）が全盛期を現出した。紹興の人である章炳麟は、王陽明の学統を継ぐ浙東学派に属するが、吳派と皖派の集大成を自らの学問的使命に課した。それには、吳派から出発し、公羊学だけでなく欧米や日本の学問をも積極的に取り入れた俞樾に学んだことが大きく与って力ある。ただし、師の俞樾が今文学にも寛容である点に、章炳麟は批判的であった。皖派の戴震による「光被四表」の考証を取り、閻若璩による『書大序』偽作説を退けた「光宅天下」解釈に、そうした章炳麟の学術の方向性を見て取ることができる。

念のために付言すれば、「光宅天下」の解釈は、『堯典』に基づいて『書大序』を読むという斬新な切り口を提示したが、解釈そのものは誤りである。そして、章炳麟の誤りの責任の一半は、戴震の「光被四表」解釈にある。

戴震の「光被四表」考証は、発表当時から中国の学術界に大きな話題を提供し、二十世紀になって、欧米の歴史実

証主義を導入する際、中国自身が産んだ「科学精神」の適例として喧伝されたことはすでに述べた。しかし、この考
えは、発表当時から、大きな賛辞と並んで、少なからぬ疑義に晒されたことを忘れてはならない。

胡適によれば、学説公表からおよそ十年の間に、戴震の友人である錢大昕、姚鼐ようだい、洪榜、段玉裁らは、戴震の考証
を補強する用例を六つ発見した。これに対して、戴震の「光被四表」解釈に対する反証例は、全部で十八ある。考証
学の錚々たる權威たちは、戴震が主張した『堯典』古本の用例を、十年を費やしてもわずか六つしか探し出せなかつ
た。ところが反証例については、それほどの労力を掛けずとも、これだけの用例を見つけ出すことができるのであ
る。

「横被四表」が「光被四表」の原型であるという戴震の主張は本当に正しいのであろうか。戴震の学問の深い理解者
である汪中も、畏友の新説に疑念を呈した一人だった。彼は、劉端臨への書簡の中で、反証となる史料を三つ挙げた。

「光被四表」の「光」を「顕」と訓ずる蔡沈『書集伝』の考えは、古音と古義を理解していない、と戴震は批判し
た。しかし、蔡沈よりもずっと早い前漢の時代に、鄭玄は「光」を「耀」と訓じたが、これは「顕」の読みに通ずる
ものである。しかも、『漢書・宣帝紀第八』の用例からは、「光」を「充」と訓ずることはできないという反証が得ら
れる。古音の実態に照らしても、「光」と「横」が音声を同じくするとは必ずしも言えない⁵⁾。

汪中の批判は、戴震の「光被四表」解釈を打ち崩すに充分であった。「光被四表」は、「横被四表」に直した上で、
「四表に横被す（広く及ぶ）」と訓ずるのではない。原文のまま「光が四表を被^{おほ}う」と解して何ら差し支えはない。
戴震は「横」を動詞、「被」を前置詞と考えたが、実際は「光」が主語で、「被」は動詞である。戴震は、前漢の時代
にほぼ決着が付いていた經典の読みを、大袈裟な身振りですりあげし、博引旁証の成果を誇示したが、それは『漢書・

宣帝紀第八』にある「充塞天地、光被四表」という八字が、「充」と「光」を使い分けているという最も基本的な訓詁の事実を無視した暴論であった。なぜ、このような誤った解釈が生まれたのだろうか。

戴震は、「光被四表」の「光」は仮借文字であるという前提から出発した。しかし、『尚書』を少し研究すれば分かるが、『尚書』に現れる文字のほとんどは、その文字の本義から解釈することができる。許慎が『説文』で述べるように、仮借という方法は、表現したい意味を示す文字がないときに、別の文字によって言わんとする意味を表記するために考案された。清朝考証学の一つの重要な成果は「小学」（文字訓詁学）による経書解釈法の導入であった。それが大きな学問成果を生んだことを否定する者は誰もいない。しかし、この方法を無原則に適用すれば、「表現したい意味を示す文字がない」という、仮借を適用する上での前提条件が忘れ去られ、仮借する必要がない場合にも、仮借によつて解釈するという乱用が生まれることは避けられない。戴震の「光被四表」考証はその典型である。ほとんどの文字が本義で読める『尚書』の読解において、第一にやるべきことは、本義通りの読みで文意が通ずるか否かの検証でなければならない。ところが戴震は、「光」という文字を本義通りに読むことはできないという前提から出発した。蓋然性の高さから言えば、「光」を本義に即して読むことが遥かに喫緊であるにもかかわらず、蓋然性がずっと低い前提からいきなり論を進めた。

章炳麟が学んだ環境は、呉派の文化圏において、戴震の属した皖派との折衷に務めた俞樾の学園である。戴震の学問への信頼は高く、事実、章炳麟は、『書大序』十二字の読みに新説を出す際、「光被四表」に関する戴震の学説を何の断りもなく採用している。だが、その一方で、古文学派の立場から、晚出書と『書大序』を偽書と断定した閻若璩には反旗を翻したのである。

彼がこのとき採った戦略は奇妙なものであった。すでに見たように、清朝考証学の全盛期を現出した戴震らの学問は閻若璩や胡渭を受け継いだものである。ところが章炳麟は、戴震を無条件に継承し、戴震の学問の前提をなす閻若璩を否定した。そうした扱いは、先の短い考証の中にも現れている。

章炳麟は、戴震の学問成果を使って、「光宅天下」の「光宅」を動詞プラス前置詞と見た。「光」は「横」の仮借字で、「宅」は「格」に通じる。つまり、「光宅天下」は、『堯典』の「光被四表、格于上下」という八字を半分に縮めたもので、その指す内容は『堯典』に等しい。『書大序』を偽書と断定する閻若璩に対して、『書大序』の表現が『堯典』を援用したものである限り、『書大序』に、古代の思想が反映しているのを否定することはできないのではないかと反論したのである。

しかし、その反論を補強する根拠として、孔穎達の『尚書正義』を引用し、その誤りを指摘したのは行き過ぎであった。『正義』は、「光宅天下」を「徳が充滿して天下に留まっている」と解釈した。この『正義』の解釈は、鄭玄が、『詩経・周頌・臣工之什・噫嘻^あ』に注して、「堯の徳光が四界の外に輝き及ぶことを言う」と説いたのを踏まえたものだ。鄭玄の解釈は、汪中が戴震批判で述べたように、『堯典』のテキストが「光被四表」と書かれていたことを前提に立論されている。章炳麟が『正義』の解釈を誤りだという以上、彼は、鄭玄の『詩経』解釈を問題にせねばならず、そうなれば、「光被四表」の四文字が確かに前漢時代に存在したことに触れざるを得なくなる。そのとき彼の解釈は、「光被四表」の古本が「横被四表」であるとした戴震の根拠なき考証を、無批判に前提としたことの可否を問われる。章炳麟の考証は、着眼点の秀逸さにもかかわらず、以上のような自己撞着によってその存在意義を失うだろう。

章炳麟が『尚書』に初めて向かった姿勢は、およそこのようなものであった。胡適が清朝考証学に見た「科学精

神」には、二十世紀前半の中国を席卷した「疑古」の風潮の萌芽があった。儒教体系に忠誠を誓い、それを顕彰するという外被の陰で、「疑古」という偶像破壊が密かに企てられていた。中国の学術を民族復興の鍵と見る章炳麟は、自身が奉ずる考証学の「科学精神」が、民族復興という大きなコンテキストに衝突し、崩れ去る現場に立ち会った運命を背負ったまま、その国学大師としての歩みを始めたのである。

四 経義と文義の解釈学

『旅獒』は『周書』の一篇で、古文尚書のみ収録する。周の武王が商を滅ぼした後、西方にあった「旅」という国が、武王に大きな犬を献じた。太保の召候は、武王が豪華な贈り物によって国家建設の初志を忘れるのを恐れ、武王に対して、王業には徳を慎むことが必要で、遠方の珍物を愛でてはならず、賢能を重んじ、国家を安んじ、人民を護るべきだと論じた。史臣（文書記録係）は、この召公の言葉を記した。それが『旅獒』である。

『旅獒』は、「仮借」によって文字を解釈しない限り、整合的な理解が難しい、『尚書』でも例外的な一篇である。しかし、かかる仮借の方法を、戴震の「光被四表」考証のような恣意的な運用に陥ることなく、適切に用いるには、どうすれば良いだろうか。実は、「仮借」による『旅獒』の読解を最も積極的に進めたのは、『尚書古文疏證』を書いた閻若璩であった。戴震の仮借には異論を唱えなかった章炳麟は、『膏蘭室札記』第四百五十条「西旅献獒」（尚書・旅獒序）において、閻若璩の仮借の方法に対する、はつきりした批判者として登場するのである。まず、章炳麟の考察を見てみよう。

【考察 a】文字を説くには、その本義を掴むことが大事であり、経を説くにはその転義を掴むのが大事である。本義を墨守すると、文字の意味は分かつて、経の意味を見失う。転義を追跡するさい、その派生した文字によって本義を改めれば、経の意味は掴めても文字の意味を見失う。『書大序』には、「西旅が獒を献じたので、太保は『旅獒』を作った」とある。偽孔安国『伝』は、「西戎が遠国から大きな犬を貢物にした」と述べ、馬融は「獒」を「豪」に作って、「酋豪を云う」と書いた。鄭玄は、「獒は豪と読み、西戎には君主がいなから、名声があつて政治権力を有した者を酋豪となし、国人はその酋豪の長官を派遣して、周王朝に貢物をもって謁見したのである」と言う。鄭玄の見たテキスト（孔壁書）は「獒」と書かれ、梅賾が晩出書で別の文字に改めたのではないことが分かる。馬融が酋豪と訓するのは、杜林や衛宏の旧説であろう。馬融はそれに合わせて「獒」を「豪」に改めたが、鄭玄は文字を改めずに、読みの方を改めたのである。「獒」のままにして誤読しない方が良いに決まっている。酋豪の古字は、「獒」に作るべきである。梅賾が、大きな犬を貢物にしたと云うのは誤っているが、酋長を「獒」と称するのは、実際には、大きな犬から意味が派生したからである。しかも、かかる意味は「西旅」という言葉そのものに由来がある。

何をもってこのことを証明できるかと云えば、「旅」という文字は「盧」に通じるからである。（『史記・六国表第三』に、「郊祀に臚する」と言うのは、郊祀に宿営（旅）することである。『左伝・閔公二年』に、「戴公を立てて曹に宿営（旅）する」とあり、『管子・小匡』に、「衛の人をまとめて、曹に出て宿営（旅）した」とあるのが、その証左である。）西旅とは西盧である。『牧誓』に、「庸、蜀、羌、鬻、微、盧、彭、僕の人々に及ぶ」とあり、偽孔安国『伝』に、「盧と彭は、西北にあり」と書く。また、『立政』に、「夷、微、盧の丞」とあるのも、西盧であることの証拠である。

盧の酋長だけが「獫」と称したのは何故か。『後漢書・南蛮西南夷列伝』は、『風俗通義』を引用して、こう述べている。「昔、高辛氏に犬戎の侵略があったが、犬戎の将で、呉將軍の首を取る者は、天下に誰かいないかと募ったところ、帝が飼っていた、五采の毛を持つ盤瓠ばんこという名の犬が、人間の頭を啗はえて皇帝の膝下に参じた。それが呉將軍の首であった。帝は自分の娘を盤瓠に娶よめせたが、盤瓠は娘を手に入れると逃走して、南の山に入り、石室の中に留まった。そこは懸崖の絶壁で、人跡稀な場所だった。娘は十二人の子供を産み、その子孫はしだいに増え、盤瓠が邑の君長となつたとき、印綬を授けた。」李賢は『風俗通義』の注で、「今の辰州の盧溪県の西に、有武山がある」と書くが、劉昭の注に引く黄閔こうびん『武陵記』を見れば、「山は千仞の高さで、山の中腹に盤瓠の石室があり、数万人が入れる。中に石牀があり、盤瓠が座つた跡がある」と記されている。盧溪の由来を尋ねれば、そこが『牧誓』や『立政』に記す盧国であり、辰州に属したことが判る。西に偏しているが、その主力は南にある。(偽孔安国『伝』に西北と書くのは、やや不適切である。) 商王朝の首都である亳、朝歌などが東方にあつたため、辰州の位置が西に偏つて見えたので、ここを西伯(文王)に委ね、周南と召南の分地としたのである。(昔の荊州城である。) そこで、西盧を称し、周王朝もこの行政区分に従つた。盧国の創始者は盤瓠で、子飼いの犬であつたから、「大獫」と呼び、求めに応じて呉將軍を殺したので、『説文・犬部』には、「犬は人の心で思うように使える」と書いた。開国の君主を「獫」と呼んだので、君長も「獫」と呼ぶ習わしが出来た。豪族となつて西北に雄を唱えた諸々の羌族には、『漢書・趙充国辛慶忌伝第三十九』が記すように、先零豪、罕行豪、大豪、中豪、小豪があつた。だから、酋長としての「獫」の文字は「敖」にも作るのである。春秋のとき、盧と楚は隣同士であつた(『左伝・桓公十三年』に「羅と盧戎が両側から攻撃を加えた」とあるのが、それである)ので、楚は夭折した君主を「敖」と呼んだ。「若敖」、「邾敖」、「邾敖」がそれである。その長官を「莫

敖」と云い、項羽時代の楚にもまだ「連敖」があり（『史記・淮陰公列伝』）、他国が「敖」と呼ばなかったのは、楚と盧の土地が隣り合わせで、その言語を共有したことを示すものでなくて、何であろうか。荀悦の『漢紀・前漢孝成皇帝紀三』に、「成帝は諱を驚、字を太孫、驚は俊あざなという意味である」と書き、『論衡・骨相』には、「王莽の姑は正君で、元帝が太子のころ、これを愛で、君上を産んだ。宣帝が崩ずると、太子が即位し、正君を皇后とし、君上を太子とした。元帝が崩ずると、太子が立ったが、これが成帝である」と記す。思うに、成帝が字を君上と呼ぶのは、漢の時代が楚の言葉を多用したからである。「驚」は「葵」、「敖」に通じ、字を君上と呼ぶから、本名と字が呼応している。これも盧の酋長が「葵」を称した理由である。

証拠はもつとある。『詩経・齊風・盧令』の『毛伝』に、「盧とは田の犬である」と書く。犬を盧と称するのは、盤瓠が盧溪にいたころ、盧溪は良犬の産地なので、犬の生産地を取って、その犬を盧と名付けたのである。豕の産地を頓丘と呼ぶのと同じである。（『広雅・釈獸』鶏を陽溝と呼び、『戦国策・秦策下』にある、韓の国の名犬、韓盧もまたそこから転化した呼び名である。以上より、盧の君主が犬であるから、「葵」と称したわけが明らかになったと思う。

そうであれば、「西旅猷葵」を解釈して、鄭玄のように、国人がその酋豪を派遣して貢物をしたと考えるのでは、文意が通らぬ。西盧の「葵」が、周王と運命を共にしなかつたので、その民が盧君を縛って、これを周の武王に献上したのではなからうか。『呂氏春秋・離俗覽・用民』に、「夙沙の民が、その君を攻めて、神農に帰順し、密須みつしゆの民が、その主を縛って、文王に献じた」と云うのは、「西旅猷葵」に同じだろう。

要約すれば、馬融や鄭玄が「葵」の文字を「豪」に改めたのは、経の意味を摺んでも、本義を見失っている、偽孔安国『伝』が、「葵」を「大犬」と訓じたのは、文字の本義は摺んでも、その派生した意味を忘れていた。したがっ

て、いずれも誤りである。それぞれの足りないところを補えば、經の意味と文字の意味の両方を得られるだろう。

【考察b】孫淵如（孫星淵）は、『國語・晋語四』の「賓旅に礼し、故旧を友とし」を使って、「西旅」を説き、「遠國に賓旅すれば、客礼をもって接待する」と解した。これは、巢伯が来朝して「旅巢命」を作ったことを念頭に置いた解釈である。だが、「旅巢命」の文章は、「巢」という国名を挙げたために、それとの連想で「旅」と言ったことを孫淵如は理解していない。それに、「旅」は「陳」と読めるが、「客」とは読めない。「西旅」を「賓客」と訓ずれば、具体的な国名を挙げないのに、その対象を「客」と呼ぶことになる。誰がそんな余計な言葉遣いをするだろうか。[1: 247-249]

この陰影に富んだ章炳麟の解釈は、その隅々に至るまで、閻若璩に対するアンチ・テーゼであり、閻若璩の見解を知らない限り、言わんとすることを理解するのは難しい。では、閻若璩は『旅獒』をどう解していたか。『尚書古文疏證』第七十五、言『旅獒』馬、鄭読獒曰豪、今仍本字』は言う。

【考察1】古人の文字には仮借が多く、ある文字を他の文字に読むことは枚挙に遑がない。『大学』『中庸』『論語』『孟子』によって証明すれば、形が相似するため仮借して、「素隱」を「索隱」と読み（『中庸』第十一章）、音が相似するため仮借して、「既稟」を「餼稟」と読み（『中庸』第二十章）、形も音も相似するため仮借して、「親民」を「新民」と読み（『大学』二章）、形も音も相似しないのに、意味が同じというだけで仮借して、「命也」の「命」を、鄭玄は「慢」と考え、程子は「怠」としたのである（『論語・憲問第十四』）。

孔壁書に『旅獒』篇があり、馬融や鄭玄はそれを読もうとしたが、「旅獒」の本義が分からなかったため、『書大序』に馬融が注釈して、「〔獒〕は〔豪〕と作り、酋豪を云う」と書いた。鄭玄が言うには、「獒は豪と読み、西戎には君主がないから、名声があつて政治権力を有した者を酋豪となし、国人はその酋豪の長官を派遣して、周王朝に貢物をもつて謁見したのである。」二人は、この篇の文章と意味から、こういう説明をしたのであろう。⁸この篇を偽作した者が、『書大序』に「旅獒」という文字があるのを知ると、すぐさま『左伝・宣公二年』の「靈公が猛犬の獒をけしかけた」や、『爾雅・釈畜』の「犬で四尺に達するのを獒と呼ぶ」などの「獒」を連想できたのに比べれば、馬融も鄭玄も文字の知識がまるでなかったかのようなのである。馬融と鄭玄という二人の大儒の、道理と正義に透徹した学問が、後代の者の博覧強記に及ばないのは、今となっては想像を絶するものだ。「獒」という文字を知らなかったのではない。それを余りにも軽く解釈したのである。

【考察2】『書大序』の「西旅が獒を献じたので、太保は『旅獒』を作った」に関する、孔穎達の疏は、「上の『旅』は国名で、下の『旅』は『陳』と訓ずる。二つの『旅』は、文字は同じでも意味が違う」と解する。偽孔安国『伝』に云う、「獒によって、道義を陳べた」がこれである。この解釈は、下文の「巢伯が来朝し、芮伯は『旅巢命』を作った」の例から思い付いたものであろう。蔡沈『書集伝』卷四は、これに基づいて、国名と解したが、文字を知らないと言ふべきである。

【考察3】「旅」とは「陳」である。偽孔安国『伝』が述べたように、「獒」によって、道義を陳べたのである。この篇は、史臣がまず篇名を決めた後で、太保の召公が『旅獒』という言葉で武王を訓戒しようと初めから考えていたのではない。前漢の伏生の伝えた『今文尚書』二十八篇には、篇の中の文字全部を篇名にした『高宗彤日』、『西伯載

黎』があり、篇の中の文字を一つだけ使って篇名とした『甘誓』、『牧誓』がある。いずれも篇名が決まったのは、文章に書かれた出来事から後のことである。ところが『旅獒』は、「太保はこうして『旅獒』を作って、武王を訓戒しようとした（太保乃作『旅獒』、用訓於王）」とあるから、篇名はすでに決まっただけで、その篇名に合わせて文章が作られた。そこで思わず、このように書いてしまったのだ。次のように反論されるかもしれない。『旅獒』冒頭のこの文章は、「惟克商」以下が『尚書』の元の序文だが、「太保乃作」以下は史臣が加えた言葉であると。そうではない。もし、そうなら、『召誥』に「太保と諸侯の君長は玉帛などの礼品を取り出し、再び宮廷に入って周公に献上した（太保乃以庶邦冢君出取幣、乃復入錫周公）」とある中に「召誥」と書かれないのは何故か。『呂刑』に「呂侯が王に告げて言った。穆王は長年位にあつて高齢であります、刑法を制定し、天下の臣民を戒めなさいませ（惟呂命王、享国百年耆荒、度作刑以詰四方）」とあるのは、ただ「以詰四方」とだけ書けば済むはずなのに、そうならないのは何故か。篇名が決まってからこんな風に論を立てては駄目だと非難するのが古文家だけであることに、人々がまだ気付かないのは、どうかしている。『三国志・魏書・任蘇杜鄭倉伝』の裴松之「注」がうまいことを言っている。「はつきりしなければ、その心臓を抉って地面に叩きつければ良い。ただの数斤の肉塊に過ぎないのが判るだろう。」

【考察4】『国語・魯語下』に「仲尼在陳」という一篇があるのは、『旅獒』の元の本文である。だが、「昔、武王が商を伐つてから（昔武王克商）」より「異姓を分けて、遠方の職務と貢物を与え、中央への服従の心を無くさないようにさせる（分異姓以遠方之職貢、使無忘服也）」までが全て孔子の言葉であるのを、今の本文が、「昔武王克商」を序文とし、「同姓と異姓を分けよ」を召公がしゃべった発言とするのは、叙述の関係を転倒するものである。『国語』は肅慎氏が楛矢を献じたことを話題にしている。肅慎は、『左伝・昭公九年』では、周の北にあると言われ、『書大

序』では、東夷と云うのを受けて、『国語』を注釈した韋昭が、東北夷の国だとした。¹⁰ 私は、この場所を考証して、今の寧古塔（黒竜江省寧安県）に比定し、東が正しいと考える。『国語』が『旅獒』を剽窃したと考えるから、東西の区別が判らなくなったのである。私は京師に長くいたが、たまたま寧古塔の出身者に、その風土を尋ねたところ、東に五〇〇キロ行くと、混同江にぶつかり、その河の辺りには榆と松の木があるそうだ。その枝は枯れると混同江に落ち、高い波濤に攫われ、長い間に石に変わるが、その石で矢や鏃が作れると言う。榆からできた石の方が上質で、松の方はそれに次ぐ。さらにそこから西南に三〇〇キロ行ったところが長白山で、山頂の日の当たらない場所と黒松の林には楷木が密生して、これを矢にすれば、材質は硬く、真つ直ぐで、乾湿に良く耐える。そこには海東青という鳥もいる。隼はやぶさの一種である。私は、その石弩を是非京師まで持って来て欲しいと所望した。そして『禹貢』が、山川だけ記録して、風俗を書かず、物産のみ記して、人材に触れないのを残念に思った。山川や物産は千年に亘って変わらない。このことは色々な人が言ったことに徴しても明らかである。しかし、風俗や人材はそうはゆかない。以上から推察すれば、『国語』の記述が真実で信頼できることは明らかだ。『国語』が『旅獒』を剽窃したのではない。『旅獒』の方が『国語』を剽窃したのである。¹¹

五 「大きな犬」を献上した「酋豪」はどこから来たか

閻若璩は「旅」の読みに、(1)西方にあった「旅」という国、(2)「陳」と訓じ、意見を述べること、という二つがあるという孔穎達の解釈（「上」旅「是国名、此「旅」訓為陳、二「旅」字同而義異」）を【考察1】と【考察2】で

否定する。『旅獒』の「旅」の意味は、とりあえず無視して良い。なぜなら、【考察3】が述べるように、それは召公が武王に訓戒する前に、予め史臣によってお膳立てされた題目だったからである。この題目の説明を省いて、「旅獒」の本文を見れば、「旅」の意味は、「陳」（陳べる）という一つしかないことが判る。また、「獒」の文字は仮借で読まねばならない。馬融や鄭玄のごとく、「獒」は「酋豪」と訓ずるべきであって、偽孔安国『伝』のように、「大きな犬」と本義通りに解してはならない。「獒」を「酋豪」と仮借で読んで初めて、晚出書の『旅獒』が、先秦文献の『国語』を剽窃して出来たものであることが突き止められる。

「西旅猷獒」という四字に、孔穎達の『正義』が、「西方の夷名」、「西方の遠国」という疏を付けて以来、帰順した人」たちは、中国の東北地方から来た人々であり、「西旅」の「西」は、偽作者の誤植なのである。『旅獒』の藍本は『国語』の故事にある。そこでは、貢物を捧げた部族が、周の北にいたことになっている。実際、東北地方にある寧古塔や長白山では、楡の樹や黒松から弓矢、鏃、石弩を作っている。これは『旅獒』が話題にする貢物に符合するものである。晚出書の『旅獒』が、この部族を「西戎」とし、朝廷への貢物を大きな犬（獒）と書いたのは、商周革命の時代の風俗や人材を知らない者の仕業であると【考察4】は論じた。

しかし章炳麟の解釈は、この閻若璩の考証を完膚なきまで批判するものである。まず、彼は【考察a】で、文字と経の解釈に当たって、本義と転義（仮借）を使うことは、相反する結果をもたらすと述べる。本義に忠実なら、文字の意味は掴めるが、経の意味を見失う。転義を採れば、経の意味は明らかになっても、文字の解釈に誤りが生まれる。それぞれの弊害を最小限に抑えるには、テキストのさまざまな場面で、本義と転義を適宜、使い分けることが必

要である。

『旅𤑔』を考証するさい、『旅𤑔』が史臣の予め用意した題目である以上、「旅」の意味から、西方にあった国の名前という本義を排除できるという閻若璩の立場を、章炳麟は採らない。この文章の「𤑔」には「大きな犬」という本義は含まれず、馬融や鄭玄が訓じた「酋豪」という転義（仮借）の意味しかないという立場も退ける。

「旅」と「𤑔」の本義と転義は、元来が、文字の成り立ちにおいて密接に関連するものである。「𤑔」について言えば、「大きな犬」という本義があるからこそ、鄭玄が述べたような、名声があつて政治権力を有した「酋豪」という転義（仮借）が生じたのである。

また、本義から派生した転義は決して一つではないはずだ。閻若璩は、孔子が陳に遊説したさい、陳の宮廷に落ちてきた隼の故事（昔、武王が商を征服した後、肅慎が武王に、一尺八寸の石の鏃で作った矢を献じたときの逸話）と、自分の京師での見聞に基づき、「旅」は「陳」（陳べる）の仮借だとして、その場所を東北に比定した。この故事は、『史記・孔子世家』に見えるが、元は『国語・魯語下』から出たものである。しかし、章炳麟は「旅」を「盧」と読んで、『考察a』の中で、閻若璩とは異なる仮説を出したのである。しかし、章炳麟は「旅」を「盧」

古代文献を精査すれば、この「盧」国は、盤瓠という犬をトローテムとする西盧王国であり、そこは楚の隣にあつて、強国の楚の言語を取り入れ、民族の同化を進めた。秦漢帝国の時代には、項羽の革命軍の中核をなし、王莽によるクーデターのさいも、漢帝国の皇族との姻戚関係を軸に、「盧」は政争を繰り広げたのである。

このように章炳麟は論じるが、翻つて、『旅𤑔』の本文にある「西旅が来たりて、その𤑔を献じた（西旅底貢厥𤑔）」の「𤑔」を見れば、孔安国のように「犬」と訓じて、「貢」という動詞の目的語と解するのが文法的には遙か

に妥当である。馬融や鄭玄のように「酋豪」が貢物を周に献じたとは、いかにしても読めない。もしそうなら、「獒」は「貢」の目的語ではなく、「主語」でなければならぬからだ。

すでにこの問題は、閻若璩の同時代人で、『尚書古文疏證』の最初の徹底的な批判者である毛奇齡の『冤詞』が取り上げていた。毛奇齡は明朝が滅びた後、黄宗羲たちと共に、満洲族の支配に対抗する長い民族戦争を闘った。しかし後に、異民族の支配を受け入れ、京師にて満洲族の指導する文教政策を担った。十九世紀末に満洲族を中原から追放して漢民族国家を再興する民族運動を興起させた章炳麟は、初期の作品『滄書重訂本』の「別録甲第六十一」(333-344-345)の中で、錢謙益と共に毛奇齡を取り上げ、二人の生涯を回顧しながら、二十世紀の民族革命が、いかにして錢謙益や毛奇齡の過ちを回避すべきかを考察した¹²。

ここで毛奇齡『古文尚書冤詞』巻六の主張を見ておきたい。毛奇齡は、閻若璩の主張を、次のようにまとめた。『書大序』で、馬融と鄭玄は「旅獒」を「旅豪」に直し、酋豪とした。西戎には君がおらず、その首長を酋豪と称するだけだった。国人はその酋豪を派遣して、周の君主に貢物を差し出し、謁見に及んだと言うのである。だが、こゝ解釈する一方で、本文を「獒は犬なり」と読んだのでは、筋が通らないではないか。これが閻若璩の主張の骨子だった。毛奇齡は、この閻若璩の疑義を次のように退けた。

これはまさに「獒は犬なり」に付した旧注である。「獒」は、西方の犬の名だ。「獒」が「豪」と通じると言うなら、「酋豪」は「君長」であるのだから、国人が自分の君長を貢物にして周まで来たことになる。それで良いのだろうか。しかも、外国にはたくさん国がある。「豪」とは、一体どの国の「豪」なのであろうか。『汲冢書・王会解』

には、「渠搜は麇犬を献じ、匈奴は狡犬を献じた」と云うから、外国には犬を貢物にする習慣があった。また『竹書紀年』で、周の武王十三年の条に、「巢伯が来賓す」と書くのは、『書大序』に、「巢伯が来朝し、芮伯は『旅巢命』を作った」とあるのと符合する。そうであるならば、一つは犬を献じ、もう一つは酋長が来朝するという事例を、『旅巢命』と『旅巢命』の二篇に分けて並べたのには、確たる根拠がある。したがって、「旅巢伯命」の「旅」の文字を「陳」と解するなら、『旅巢命』もまた「陳蔡」と訓じて、国名を記す必要はないはずなのに、実際は「西旅」と明言している以上、「西陳」と訓ずることはできない。『左伝・昭公元年』の「蔡蔡叔」の、「蔡蔡」の二文字を（周公の兄の管叔と弟の蔡叔という）二つの意味に解して良いなら、『旅巢命』と『旅巢命』の二篇にある二つの文字を、二様に解釈しても不都合はないはずである。また、「旅巢伯命」とは、命令を陳べることだが、酋豪には武王に命令を陳べる権限はなかったはずだ。¹³

閻若璩は、彼が偽作と信じる『旅巢命』の偽作たる所以は、同じ文字を同一文章の中で二様に解釈することの不自然さにあると論じた。しかし毛奇齡は、『旅巢命』における二様の解釈は、『旅巢命』というもう一つの文章との関係性から生まれたことであり、また『左伝』の例にも見る通り、同じ文字を同一文章の中で二様に解釈することは、これまでの訓詁の歴史に照らして異常なことではないと論じた。ところが章炳麟は、こうした解釈上の懸案をいとも簡単に解決したのである。彼は、毛奇齡が疑問点とした、「国人が自分の君長を貢物にして周まで来たことになる」という解釈をそのまま受け入れたのである。

『呂氏春秋・離俗覽・用民』には、「夙沙之民」が神農に、自らの首長を縛って献じた故事が記されている。章炳麟

は、「西旅（西盧）」の国の人々もまた、武王に帰順しようとしないう首長を拘束し、周の武王に人質として差し出したのではないかと推測したのである。『旅獒』の解釈に『呂氏春秋』を援用する示唆を与えたのは、彼の【考察b】が話柄に取り上げた孫淵如（孫星淵）『尚書今古文注疏』であろう。その『旅獒』の解釈に、『呂氏春秋・恃君覽』が援用されているからである。¹⁴

孫星淵、字は淵如。江蘇陽湖（今の武進）の人。乾隆五二（一七八七）年、進士。翰林院編修を経て山東の督糧道、杭州の詒經精舎と江寧の鐘山書院で教鞭を執った。『尚書今古文注疏』は、古文尚書と今文尚書に共通する本文のみに注疏を施したもので、折衷的な立場を標榜する反面、今文学派の見解を支持する場面が多い。『旅獒』の解釈も、同文を孔安国が作った偽書と見る立場から、本文批判にまで及ぶ。その観点は、章炳麟の到底容認できるものではなかったが、そこには重要なヒントが含まれていた。

章炳麟は、「旅」と「獒」の本義と転義を縦横に駆使して、武王東征から王莽の時代に至る西南民族の歴史をパノラマのように展開して見せた。その意表を突く見解の数々は、文字学と経学を二つながら調和させようとする彼の野心的な解釈学を支えられている。古文尚書の『旅獒』が偽作であるはずはない。また、偽孔安国『伝』は、なるほど偽書には違いないが、至る所に、古代に存在した『尚書』の断片を埋め込んでいる。『旅獒』を『国語』の焼き直しだと言い、偽孔安国『伝』を頭から退ける閻若璩、あるいは鄭玄の見た『尚書』に欠陥があったと見る孫星淵に、中国古代史を云々する資格はないと言うのである。

六 閻若璩はなぜ『孟子』を重視し、章炳麟はなぜそのことを評価したのか

『尚書略説』は、国学講習会における章炳麟の連続講義の記録である。開催日の記載はないが、一九三五年の作品と考えられる。そこに、清朝考証学の『尚書』研究の成果について、次の言及がある。

清代の康熙帝のとき、閻若璩（百詩）は『古文尚書疏證』において、初めて、鄭玄が注を書いた『尚書』が真本であることを明らかにし、また『孟子・万章上』に「父母が舜に米倉を修繕するよう言いつけ（父母使舜完廩）」と書かれた箇所は、『舜典』の真本を引用したと述べたが、この二つの学説は卓見と言える。〔15：637〕

章炳麟が閻若璩の『尚書』考証に批判的であったのは、すでに見た通りだが、『尚書』真本問題、『舜典』真偽問題についての閻の考察を、彼は高く評価している。『舜典』真偽問題に関する閻の考察は、『尚書古文疏證』第十八「言趙岐不曾見古文」に見ることができる。

『古文尚書』は後漢に発見されたけれども、学官に立てられることはなく、当時の儒者たちは師の講筵に列しない限り、それを見る機会はなかった。たとえば、『後漢書・趙岐伝』は、『古文尚書』の経と注に趙岐が精通してなかったと記し、その中の『周官』を読んだとは書かれているが、『古文尚書』そのものを勉強したとは記されていないから、どの書物が古文で書かれていたかは分からぬ。『孟子・万章上』の、「堯帝がその子である九男と二女をして」

の件に、趙岐は注して、「『堯典』には『二女に（嬀ぎ、汭にまで）行くように命じた』とはあっても、『九男』のことは見えない」と述べた。孟子のころ、『尚書』は百二十篇あったが、今の『逸周書』に『舜典』の叙述は見えても、その文は載せていない。『孟子』の幾つかで言及される舜の事績は、いずれも『堯典』と『逸周書』に基づいたものであるから、古文の『舜典』を孟子が見ていなかったのは確かである。思うに、古文『舜典』には別にもう一篇があって、今見る孔安国『伝』が『堯典』を二つに分断して『堯典』と『舜典』を作った、その『舜典』とは別のものである。だから『孟子』は、「二十八年経って、堯帝の放勳は崩御された」という語を『堯典』からの引用とし、『舜典』からはしなかったし、『史記・舜本紀』もまた、「慎重に五典を完成させ」から「四人の罪人が罰せられて、天下が尽く帰順した」までを『堯本紀』に入れ、『舜本紀』には入れなかった。（件の引用文は、実際は「五帝本紀」からのもので、『史記』に「堯本紀」「舜本紀」という区分はない。引用者注。）孟子のころ、『典』や『謨』は完備しており、篇次にも乱れがなかったことは確かだと言つて良い。司馬遷もまた孔安国に直接、古文を教わつたから、彼が書いた文章に誤りがあることはない。私はかつて、『孟子・万章上』に、「舜が田に出かけ、「常に畏れ慎み、瞽瞍の前に出た」と言い、「朝貢の時期も待たずに、政治に関すること有庠の君に接見された」と述べることの意味を理解できず、これらは『舜典』から取られたものではないと考えていた。また、「父母が舜に米倉を修繕するよう言いつけ」の件は、文章が晦渋で、『孟子』に一般の達意の文とはまるで違う。『史記・舜本紀』もこれを引用するが、その文章には追加や異同が多く、原文には遠く及ばない。¹⁵ 文辞には時代ごとの格調があり、それらを無理に合わせることはできないことが分かる。『孟子』のこの箇所は『舜典』真本の文章であるが、その意味するものを心で会得するしかない。¹⁶

孟子は万章との対話の中で、舜の父母弟が舜を謀略で殺害しようとしたが、舜は巧みにその難を避け、肉親の至情から、彼らが非難されないよう、その罪を庇った故事について論じた。この箇所は古来、家族倫理を重んじる儒教道徳との整合性から、さまざまに議論されたものである。論点の一つは、『尚書・堯典』の記述との関係であった。孔穎達の『尚書正義』巻二「堯典第一」は、「よく父母弟に孝を尽くし、自らを正しく修め、邪悪に流れなかった（克諧以孝、烝烝乂、不格姦）」という語を取り上げ、これについては、まず、孟子が「父母弟をみな悪と考え」、「文章を繰り返して」、「そのことを強調したと述べた上で、『堯典』、『孟子』、『史記』の当該箇所を関連付けて説明した。そのさい、孔穎達が参照したのは、馬融、鄭玄、王肅の三つの本文であった。中でも、鄭玄、王肅の二本は、『古文尚書』で『舜典』に分類される文章が、『堯典』に含まれていたことを告げる。だから、孔安国『伝』の本文には「古文と今文の別巻」があったのではないかと、孔穎達は推測するのである。¹⁷

閻若璩は、古文尚書の文章が、東晋の時代に先秦文献を継ぎ合わせて献上された偽書であることを証明しようとした。今の『尚書』に収める文章は後世のもので、そこから真正の尚書の姿を復元することは難しいと見た。ところが、『堯典』で舜を話題にした箇所に限って言えば、戦国中期の『孟子』が引く語こそは、真正の『舜典』の文章にほかならないと述べるのである。なるほど、今に残る『舜典』は、孔安国によって分割された『堯典』後半に当たっており、文意が不明で、格調にも欠け、『孟子』の引く『舜典』の流麗な典雅さには遠く及ばないように見える。だが閻若璩は、真正の『尚書』の文章は見出し難いにしても、『孟子』が引く『尚書』に限って言えば、それらが真正の文であることは間違いないとした。この閻若璩の議論を、章炳麟は、鄭玄が使った本文が『尚書』真本にほかならないことを初めて明らかにしたものと要約するが、孔穎達の『正義』は、鄭玄の本文だけではなく、馬融や王肅の本

文も参照したと述べているのだから、閻若璩が鄭玄の本文だけを『尚書』真本と考えたと結論付けるのは正確ではない。

閻若璩が『孟子』に引く『尚書』断片を重視したのは確かである。第五十一「言罔以『孟子』引『書』叙事為議論」には、『孟子』の注釈者である趙岐の発言として、孟子が『詩』と『書』に通じていたこと、特に『書』については、その文章をすみずみまで暗唱していたことを取り上げ、孟子に限って『尚書』の引用に誤りはあり得ないと述べている。¹⁸第五十二「言以『管子』引『泰誓』史臣辭為武王自語」もまた、『孟子』の『尚書』引用は発話者が誰かを良く踏まえるが、古文『泰誓』は、そこに重大な誤りがあると言うのだ。

七 「書伝」という概念の提示

閻若璩が、古文『尚書』は後世の偽作だという主張を一部変更して、古文『泰誓』にも真正の『尚書』本文が含まれるという結論を下すに至ったのは、『孟子』が引用する『尚書』は本物であると、彼が固く信じたからである。『孟子』の他にも、『墨子』が引く『尚書』を、彼は古文尚書偽作説を証明するリトマス試験紙に使っている。『墨子』や『孟子』には、確かに、かなりの量の『尚書』断片が残されており、現行の今文尚書、古文尚書の真偽を測る論争において重要な役割を果たしてきた。章炳麟もまた、その古文尚書論において、『墨子』、『孟子』が引く尚書の断片を重視した。しかし彼の関心は、そうした史料を使って古文尚書偽作説を証明することにはなかった。そうではなくて、それらの史料の特徴を「書伝」という概念に要約した上で、尚書の原初の姿を再現しようとしたのである。

「書伝」は、孔穎達が『尚書正義』を書くさい参考にした文献の一つ、伏生の『尚書大伝』を指すのが普通である。しかし、章炳麟の言う「書伝」は、それとは全く違っており、数ある『尚書』原本のなかで最も始原に位置するものを指す。「書伝」の着想は、一九三五年の講演録よりもずっと早い一九一一年前後に得られた。時代は辛亥革命直前に当たり、彼が孫文、黄興に並ぶ「革命三尊」と呼ばれたころである。

「書伝」は、上代の史官が書いた皇帝に関する事績を、孔子が整理して作った記録である。史官の残したものは十全ではなかった。それらは外史が管理し、左史が朗誦した。だから、口承のみで伝わった記録も少なくない。孔子が見たものには、三皇の記録は全くなく、五帝についても、堯と舜を載せるのみであったが、それでも孔子が五帝徳を論ずることができたのは、黄帝、顓頊、帝嚳（ていこく）に関する口承が残っていたからである。こうした口承と記録の総体を「書伝」と呼ぶ。『史記・孔子世家』に、「孔子は『書伝』に序を書いた」、「『書伝』と『礼記』は孔子に由来する」と述べる通りである。孔子以前に、この「書伝」を閲覧する機会を得たのは墨子だった。また孟子は、「書伝」になることは軽々しく口にするのを自らに禁じた。章炳麟が『尚書』故言（こごん）に書くように、墨子と孟子こそは、孔子の「書伝」の継承者であった。（3：393-394）

章炳麟が「書伝」という概念を初めて尚書研究に導入したのは、一九一〇年に先校本が出され、一九一九年に校本とした『国故論衡』においてだった。その中巻「文学七篇」に収める「明解故上」に、「書伝」に関する詳しい考察がある。（5：68-70・240-243）『漢書・芸文志第十』は『尚書』の解釈本として、大小夏侯の『解故』という本を紹介する。「明解故上」は、この大小夏侯の『解故』を論じ、その『解故』に示された古典解釈学の歴史から「書伝」という概念を帰納したのである。²⁰

「明解故上」は次のテーゼを提出することから始まる。²¹

校は『詩経・商頌』が詳しく、故は『尚書・大誓（泰誓）』から始まり、伝は『周易』に備わり、解は『管子』『老子』が弁じてゐる。〔5：240〕

「校」は、書物を校訂することで、學術の源流を探り、文字を比べながらその誤りを正すという二つの方法を探る。故事と故訓の二つを含むのが「故」である。「伝」は、古典の意味を伝えること。「解」は、先人の書物の解題である。

さて『国語・魯語下』には、「孔子の祖先である正考父が、周の太師のところで『詩経・商頌』十二篇を校訂し、『那』を最初に置いた」と書く。『左伝・昭公七年』が記すように、正考父は、三命の度に態度がいよいよ慎ましく、その鼎の銘文にも、「一命にて士となれば頭を低め、再命にて大夫となれば背を曲げ、三命にて卿となれば腰をかがめよ。墻に沿つて歩んでも私を侮る者はない。この鼎でお粥を作り、重湯を作り、私の口を糊せよ」と記された人である。この正考父が、「故」を初めて『那』の詩に託し、それらを集めて、要点をまとめた。その後は、『国語・魯語下』が、「自古在昔、先民有作。温恭朝夕、執事有恪」と記すように、昔の聖王が事を専断せず、恭順なさまを伝えるに当たり、それらを『古くから（自古）』と讃え、古いさまを『遠い時代に（在昔）』と言ひ、昔のさまを『初めの民（先民）』と言つた。ここには、文章を削除訂正する意図が語られている。孔子が『詩経』を記録したときは、「詩序」にもある通り、『風』『小雅』『大雅』『頌』の四つを通じて、王道が興廢する始めを探り、『論語・子罕篇』に言うごとく、『雅』と『頌』がそれぞれ、そのところを得た。『尚書』を百篇に削つて、『堯典』をその巻首に置いたの

も、優れた校訂作業だったと言えよう。〔5：240-241〕

學術を分類し、その源流を探る「校」の方法を受けて、次には、文字を校合することが模索された。『呂氏春秋・察伝篇』には、孔子の高弟の子夏が、晋に行くさい、衛に立ち寄って、衛の古い史書を閲覧した故事を記す。その史書には、「晋が三豕に河を渡った」という一節があった。子夏は、この「三豕」が「己亥」の誤りだと断じた。「己」と「三」は字形が近く、「豕」と「亥」は意味が似る。果たして、晋に着くと、己亥のときに晋が渡河した過去の記録が確認された。こうした比較の方法が、「校」の二番目に当たる。

劉向りゅうきやう父子は『七略』の編集を監修して、余計な文章を削り、不足する文章を補って、書物の原始の姿を明らかにし、その優劣を整理したが、この作業は、先の「正考父」や「孔子」の校訂に通ずるものだ。また、彼らが多くて書物を比較して、異本を確定し、誤植や錯簡を正して、当時の書物の形態であった竹簡に本文を確定したのも、子夏のやったことを受け継ぐもので、校訂の作業はここから広まっていったのである。

八 「故」と「伝」の歴史

「校」の起源とその発展の歴史を振り返った後で、章炳麟の探究は、「故」と「伝」の歴史の解明へと向かう。「書伝」という概念が、その中から浮上してくる。

章炳麟は、「書伝」の歴史を、『国語・周語下』、『左伝・定公元年』、『国語・魯語下』、『呂氏春秋・仲冬紀・至忠篇』の物語から語り始める。単襄公は『太誓故』から、「朕は自分の占いが当たって、麗しい瑞祥と合体し、商に進

軍して必勝する夢を見た」という武王の言葉を引いた。この『太誓故』の「故」とは、『国語』を注した韋昭の解によれば、「故事」を意味する。²²魯の定公元（前五〇九）年に、薛と宋の間で軍役の割り当てに関する紛争があった。仲介に入った晋の士伯は、薛の歴史について、国の「故」府を調べる約束をした。孔子が陳に遊説したとき、隼が陳の宮廷に落ちて死んだ。楛矢が刺さっていた。八寸の長さの石矝もあった。陳の恵公は孔子にこの不思議な出来事を問い合わせると、孔子は、武王が紂王を伐った後、肅慎氏が楛矢と石矝を獻じ、姫姓を賜与され、虞胡公を妃とし、陳に封ぜられた故事を語った。詳細は諸「故府」を見られたい、とも言った。荆の莊哀王が雲夢で獵をし、随兕という犀牛を射た。そこへ申公子が飛び込み、随兕を奪ったので、莊哀王は申公子を不敬罪で誅しようとしたが、左右の大夫は、申公子が賢人であるからと助命を請うた。三か月後、申公子は死んだ。後にその弟が、兄は冤罪であることを供述した。申公子は平府の「故記」を読んで、「随兕を殺す者は三か月を経ずして死ぬ」という占いを得、随兕を射た莊哀王を救おうとしたのである。高誘はこれについて、「故記は古書なり、平府は府名なり」と注する。

以上の物語から、各地方政府の「故府」には「故記」が所蔵されたのを知ることができる。『太誓故』も、そうした「故記」の一つである。現在、古文尚書に収められる『泰誓』も、この『太誓故』を基に孔子が整理した「書」にほかならなう。〔5：241-242〕

漢代に「故」を管理する役所があったことは、『漢書』の晁錯伝や儒林伝から明らかである。特に『詩』を説明するのに、故訓をもつてした。『漢書・芸文志』には『毛詩故訓伝』三十巻を記す。こうして、最古の民に関する「故」が集大成されて、故事が生まれ、故訓ができたのである。『毛詩』以外にも、詩三家として、『漢書・芸文志』は、

『魯故』二十五卷、『韓故』三十六卷、『齊后氏故』二十卷、『齊孫氏故』二十七卷を載せる。これらが「故訓」の流派である。『書』や『春秋』もまた記事の書籍であるから、故事を含んでいる。『太誓』に「故」があるのは、『春秋』に「伝」があるのと同じである。馬融はその疏で、「書伝」から『太誓』を引用したが、それらは現在全て紛失した。「故」からの引用であったため、さまざま意見が生まれることになったのである。[5: 242]

ここまで、「明解故上」の総論に当たる部分を説明してきた。章炳麟の議論の目的は、『詩』、『書』、『春秋』を「故(事)」の観点から統一的に把握することにある。古文尚書の『太誓』の真偽を判断するには、「故事」との関連からなされねばならないというのが彼の立場である。それは、『泰誓』三篇を全て偽書と断じた閻若璩の考察、それを継承した戴震や段玉裁ら清朝考証学との全面的対決を意味するものであった。章炳麟のそうした立ち位置を確認する上でも、ここで『泰誓』に係るそれまでの論争史を簡単に振り返っておきたい。

九 『泰誓』の真偽問題をめぐって

「明解故下」が述べるように、『泰誓』の真偽問題の口火を切ったのは、前漢の馬融である。孔穎達『尚書正義』「泰誓」の疏に、馬融の考えが紹介されている。「馬融の書序に、泰誓は後出のもので、その文は原文よりも浅薄であるようだ」と記してある。また、『八百の諸侯が、招かれずに来訪したさまは、期せずして時を同じくし、凶らずも辞を同じくし、火が王宮に昇るや、流れて驚になり、五度至るや、穀物が天から降ってきて、火を放って神怪な動き

をした」と述べるのは、孔子が怪力乱心を語らぬと言ったことと矛盾するのではないか。馬融はこう疑問を呈した上で、現存の『泰誓』が原初のものではないことを示す先秦文献の『泰誓』引用例五つを列挙した上で、次のように論じた。隸書〔今文〕で書かれた『泰誓』に、この五つの文章はない。これまで『書伝』を随分見てきたが、そこに引用された『泰誓』で、今の『泰誓』に見当たらないものは多数にのぼり、全てを列挙することができないほどである。この五つを挙げれば、それでおよそのことは判るであろう。」孔穎達は、馬融の考えをこうまとめた上で、王肅の『書注』序にある、最近発見された『泰誓』は元の経文ではないという意見も紹介している。²³

かかる馬融の疏の考えに対する最も有力な反論として、『泰誓』を引用した先秦文献のうち、『国語・周語下』の引く語が『太誓（泰誓）故』と名付けられていることに、章炳麟が注目したのは、すでに見た通りである。彼はそこで、『故』が書名であることに注意を喚起した。しかし、この主張は、『国語』の原意を逸脱した「強度の誤読」と称すべきもので、興味深い見解ではあっても、学問的議論としては恐らく成立しない。彼は、そのアイデアを、劉師培との意見交換から得ていた。一九〇三年に劉師培に宛てた書簡²⁴は、劉師培の「駁太誓答問」を論じる中で、次のように述べている。

『国語』が『太誓故』を引用する点だが、「故」とは古い事柄を訓じるということで、墨子と孟子の引用だと疑われるものは、全てこの『太誓故』の中にある。〔12：131〕

伏生『尚書大伝』二十九編のうち、『泰誓』一篇については前漢の武帝の時代に、その出自を疑う意見が出たため、『漢書・儒林伝第五十八』は、当該書の篇数について二十九と二十八の両論を併記した。『隋書・経籍志』には「伏生

が口頭で二十八篇を授け、河内の女子が『泰誓』一篇を得て献上した」と書かれる。

清朝の考証学者の意見もまちまちである。王引之は、『経義述聞』の「伏生尚書二十九篇説」で、伏生『尚書大伝』の二十九篇に『泰誓』はあつたと言う。陳寿祺『今文尚書後得説』は、劉向父子が『七略』に記す通り、二十九篇に『泰誓』は含まれていないと説いた。今文『泰誓』の有無についても、錢大昕が『潜研堂文集』巻一で、今文『泰誓』の存在だけを主張したのに対して、王鳴盛の『尚書後案』は、先に触れた「神怪」の箇所は史臣が加えたものであつて、それを理由に『泰誓』を偽書と見ることはできないと反論した。しかし、章炳麟は、『国語』に『太誓故』という宮府の『書伝』を載せる以上、『泰誓』は古代文献としてはっきりした出自を有すると主張したのである。²⁵

では、そうした真正の古代文献の個々の姿は、どのようなものか。章炳麟は、先ほどの「明解故上」において、『尚書』の復元を試みている。まず、『史記・孔子世家』の「書伝」情報を紹介し、孔子が『尚書』に序を書くと共に、その「伝」をも記録し、「棘下」^{きやくか}の生が、その「書伝」を得たと言う。「棘下」とは、「稷下」、つまり荀子が祭酒（学長）を務めた学園を指す。「書伝」は、斉魯を中心に広く識者の間に流布していた。墨子もこの「書伝」を見た一人である。『墨子・兼愛中』が引く「武成」は、「昔、武王が泰山を削つて道を作つたとき（昔者武王將事泰山隧）」²⁶まで『書』の経文であり、「伝」に曰く「以後が『書伝』に当たる。『墨子・尚賢中』にも、『伊訓』と『湯誓』の引用がある。賢人を尚とぶという考えは墨子に独自の思想というよりは、先王の書物が聖王の道について後から纏めた思想なのである。他にも、『墨子・明鬼下』が、今の『尚書』の『甘誓』を、『禹誓』という名で複数引用している。[5: 242]

墨子以後の思想家では、孟子が『尚書』の言葉を重視した。『孟子・梁惠王下』で、湯王が桀を放ち、武王が紂を

伐ったことの是非を論じた中で、孟子は、「湯と武の革命の事績は『伝』の中にある」と述べている。孟子の言う『伝』もまた『書伝』である。他にも、『孟子・万章上篇』の「米倉の修繕（完廩）」や「井戸浚え（浚井）」の引用、『孟子・滕文公下篇』の「穀物を奪う（仇餉）」の引用は、いずれも舜と父母弟との関係を良く現しており、『書伝』に基づかずしては不可能である。『漢書・酈陸朱劉叔孫伝第十三』の「婁敬伝」も『太誓』を引くが、伏生の二十九篇には『太（泰）誓』がないのだから、婁敬もまた『書伝』に依って、その「故」を描いたのである。（5：292）

要約すれば、『書伝』には、多くの種類があつて、孔子の時代からして複数が存在した。偽孔安国『伝』には記録されないが、その「故伝」は形としては残っていたのである。だから、孔子旧宅の壁から発見されたのは、これら旧伝であつて、『史記・河渠書』に引く「夏書」は、やはり『泰誓故』と同じ『書伝』なのだ。だが遺憾なことに、前漢から後漢にかけての緯書の大流行によつて、これら『書伝』に該当する『逸書』二十四篇が散逸し、『書伝』もまた失われた。伏生の記憶も定かではなく、馬融や鄭玄もまた礼堂に収める「旧伝」を見たことはなかった。孔子、膠東庸生、司馬遷らの遺学は中絶して伝わらず、伏生の本文を越えることができなかった。古文の断片は残つたが、その故事は人それぞれで説き方が違つた。世の人々は、学官の旧套を墨守するのみで、伝を作る者が故事を廃止しようと言ひ出す有様であつた。例えば、『左伝』は『春秋』の経を伝えないという意見は、伝そのものに故事が記載されていることに無知な証左である。以上が「故」と「伝」の第一の弊害である。また、故事を説くにしても、それを分類しようとするのは、第二の弊害である。（5：242-243）

先に見た『膏蘭室札記』第四百五十条「西旅猷斃」（尚書・旅斃序）で、章炳麟は、文献の解釈の中で、文字の意味と経の意味が食い違ふのは良くあることで、本義と転義を適切に使ひ分けることが必要だと述べていた。『国故論衡』

を書くころには、文字の意味と経の意味は、「故」と「伝」という概念で説明されるようになった。そして、「故」から「伝」への歴史の変遷が「書伝」の中に記憶されていることが強調されるに至る。それら複数の「書伝」を用いれば、古代の思想史を再現することができるであろう。特に彼が議論の中心に置いたのは、『尚書』の『泰誓』という文章であつた。墨子や孟子は『泰誓』の原型に当たる「故」を記録しており、それは『泰誓故』という「書伝」として残されている。この「書伝」をその古代史の原初へと遡ることが、章炳麟の『尚書』読解の次の課題となつた。

十 影射史学への異論

「書伝」の「故」は、古代史の事実であり、後世の憶測でその解釈を変えられるものではない。この章炳麟の姿勢は、經典の「故」を根拠にして、現代を論評する悪弊を痛罵するものである。『尚書』に関して言えば、文王は果たして王命を受けたのか、周公は摂政の位に就いて、王として衆に臨んだのか、という問題は、宋代の儒者が提起してから、『尚書』解釈の大きな争点になつていた。いわゆる「文王受命」、「周公摂位」論争である。章炳麟が生きた時代にも、その余波は続いた。光緒三十年代、武漢にいた張之洞の幕僚たちは、文王受命が、康有為の『新学偽経考』が説く孔子改制の思想を誘発すると警戒し、文王受命はなかつたとする議論を展開した。光緒から宣統に代わるころには、宣統帝の父親の醇親王戴^{さいほう}豊が政治の中心に浮上するに伴い、「周公摂位」待望論が学問の衣装を纏つて語られることになつた。簡朝亮が『尚書集注述疏』を一九〇九年に公刊し、その中で「周公摂位」をめぐる自説を展開したことも、そうした時代の流れに棹さすものであつた。章炳麟は、同書刊行後、直ちに著者に以下の書簡を送る。

竹居先生惠鑑

簡先生の学風を知って久しく、昨日、門下の者より『尚書集注述疏』を頂戴しました。古代を述べて現代を風刺すべく、敢えて筆を取られたと推察します。ただ、周公居摂の史実を論じて、摂政は摂位に同じではないと仰るのは、今の時政に照らして先民を推察するもので、古文や今文の実態とは乖離し、適切を欠くのではないかと愚考する者です。
[8 : 165 ; 12 : 346]

今、後漢の再興をもって前漢の事例とし、秦漢をもって春秋の事例とするならば、それは誤りであり、春秋をもつて宗周の事例とすることも邪道であります。何故かと申しますと、世には文質があり、事には緩急があつて、古法から今制は演繹できないし、今事から古代を推理することもできないからです。[8 : 166 ; 12 : 347]

宋代の儒者は、古制に昏く、あらゆる事柄を時事に結び付け、自分の主観に照らして、周と漢の「故言」に疑念を投げかけ、『書大序』を廢棄するに至りました。六芸の明文、旧史や世伝の学説を信じる代わりに、墮落した学者の影射の言葉信じました。私の信じるところでは、『尚書』や『春秋』は、左史と右史が記録し、学者がそれを研究したもので、『史記』や『漢書』に等しく、その典礼を辿り、その行事を明らかにすれば、後世の私たちは、知識の源を探し得て、国故を忘れることはないでしょう。これが最も肝要なことなのです。古と今には変化があり、それらと同じ視点で論じてはなりません。經典を實踐に役立てるといふ考えもまた、漢代の儒者が利録を追求し、世に阿ねたのと同じで、間違つております。經典に書かれたことは、古今同じであるから、それを是として、今の世を非と決めつける。それが叶わないと分かると、古代の經典の文脈を変え、その史実を抹消しようとする。この二つは、世に

阿ねるか否かの違いはあっても、經典の意味を見失っている点では同じなのです。²⁸〔8：169：12：360〕

簡朝亮の議論は、周公は摂政であつて王を称したことはないと論ずるものであつた。醇親王さいほう戴溎に新政を期待する世論に、むしろ警鐘を鳴らすものだった。政治的立場は章炳麟と共通している。にもかかわらず、章炳麟は簡朝亮に向けて、「故言」を安易に現代史の視点から解釈し、現代史に結び付けてはならないと述べた。それは裏を返せば、『尚書』の「故言」を古代史の現場に置いて解釈する方法を模索するということであつた。『太炎文録統編』巻一に収める「尚書統説」には、「説西伯戡黎序」の雄編がある。²⁹章炳麟が『尚書』を素材に、古代の歴史を復元する方法を良く示す文章である。期せずして、それは「文王受命」論争への彼自身の回答となつていた。

十一 文王が受命したのは何時か

『西伯戡黎』は、周の文王（西伯）が殷帝国の植民地である黎の国を打ち破つたのを見て、殷の賢臣である祖伊が、紂王の御前にて、周の攻撃を跳ね返し、国家存亡の危機を打開する方策を論じた、紂王と祖伊の対話記録である。この文章が提供する論点は二つある。第一は、西伯（文王）が黎を討つたときは何時かという問題であり、第二は、西伯が黎の征討を含む革命戦争の、どの時点で受命し、王を称したかという問題である。章炳麟は、まず、第一の問題を検討する。

伏生の『尚書大伝』に、「文王は一年にて虞と芮を属国とし、二年にて于を伐ち、三年にて密須を撃ち、四年にて吠夷を討った。そこで、紂は文王を捕らえたが、周りの友人が宝物を紂に献じて、虎口を脱することができた。脱出後にまた征討を始め、六年にして崇を破り、王を称した」とある。一方で、太史公は『史記・周本記』に次のように書く。「西伯が捕囚を解かれ、虞と芮を正式に属国とした。明年、犬戎を打ち、明年、密須を討伐し、明年、耆国を破り、明年、邳を伐ち、明年、崇侯虎を討つて、豊邑を作った。明年、西伯は崩じた。詩人は、西伯が受命の年に、王を称して、虞と芮の訴訟を断じた」と詠った。」(邳〔于〕を伐った時期が、『尚書大伝』と『史記』で相違していることが判る。『尚書大伝』は捕囚を解かれる前に于を伐ち、それから受命したと書く。『史記』では、捕囚を解かれた後に受命し、その四年後に于を伐つたことになる。)

思うに、密須、犬戎はいずれも岐周の西にあるから、これらの国を伐つたのが、崇侯の討伐の前であるのは間違いない。黎の国は漢代の壺関(山西の長治)で、邳は漢代の野王(河南の沁陽)である。文王が崇から討伐を始めなかつたのは、東の道が塞がれて、遠征が叶わなかつたためであるのは明らかだ。伏生や太史公はいずれも地理の考証を怠り、文王の征服の順序を間違えたが、伏生の誤りは特に大きい。(なぜなら、彼は、西にある密須、犬戎の征討を、東にある于〔邳〕の後の出来事としたからである。)

邳とは野王のことで、紂が首都とした朝歌からは、古代の距離で三百里に満たない。文王が兵を(邳を含む)畿内で挙げたとしても、紂の勢力は衰えていたから、文王を捕らえることはできなかつたはずだ。かの祖伊の恐懼も、黎の国が平定される以前のことだつたであろう。(『史記・殷本紀』によれば、紂王は、西伯昌、九侯、鄂侯を三公とした。そこに付した『集解』で、徐広が、「鄂を、邳と作る本があり、野王県には邳城がある」と記すが、そうであれ

ば、自分を諫めた邗侯を干し肉にした後で、紂王は必ずや信頼できる邗の側近を、改めて三公に任命したであろう。それを防ぐため、文王は邗を伐ったのである。捕囚前に邗を伐てば、自分と同じ身分の三公を討つことになる。それはそもそもできないことであった。これが、文王が畿内を後回しにして、まず邗を伐った理由である。

また、文王の四回の征討は『詩経』や『尚書』に載っているのに、邗を撃つただけは文献の手掛かりがない。今、『孟子・滕文公下』が『太誓（泰誓）』を詳しく引用するのを見れば、「我武惟揚、侵于之疆、則取于殘、殺（この文字は、古文では「手」に作っていたので、偽孔安国『伝』の『太誓』は「我」に改めた）伐用張、于湯有光（我が武王の武威はますます奮い上がり、紂の領土に攻め込んで、殘虐者を討伐し、我が武勲はいよいよ盛んにして、桀を討つた湯王の武威よりも光り輝いた）」とあり、「侵于之疆」の四字は、伏生が「邗を伐ち」と書く根拠となったものである。（『韓非子・難二』にも、文王が孟を伐つたと述べる。³⁰伏生の『尚書大伝』には古い『太誓』が含まれていないのに、「二年にて手を伐ち」という記述があるのは、彼が若きころ暗記したからであろう。）『太誓』が周の威徳を讃えるのは、文王を中心になされることが多い。だとすれば、文王の用兵の真髓は、邗を伐つたことの中にある。これが捕囚前の出来事であるはずはない。（9：5）

章炳麟が上の考察で注目するのは、邗の征討である。『尚書大伝』と『史記』では、紂王による捕囚前に革命戦争が始まったのか否かという問題や、犬戎、密須、邗の征討の順次に関して、大きな見解の違いがある。問題を厄介にするのは、邗の征討に関する記述が、どの先秦文献にも見当たらないことだ。章炳麟は、「邗」は「鄂」の仮借であり、文王と共に殷の「三公」を勤めた邗侯が肅清された後に、征討が始まったと解した。これは、かつて誰も指摘し

なかった論点であるが、にわかには承服し難い。『韓非子』が言う「孟」をそれに当てる考えも、著名な「孟鼎銘」の内容に照らせば、誤りである。王国維の高弟で夭折した楊筠如が、『尚書覈詁』卷二「商書」の「西伯戡黎第十」において、「邶」を『漢書・地理志第八上』にある「鄆えん」に比定し、文王が遷都した豊のすぐ西にあったと解するのが適切である。³²

章炳麟が、「邶」の征討に着目したのは、そこに文王の革命戦争の本質が現れていると考えたからである。それは文王が殷の畿内に進駐した初めての戦いであった。紂王が指揮する朝歌からは三百里の、ここでの出来事は、孟子が記す『泰誓故』の情景に符合することが重要なのである。『孟子』の文は、「我武惟揚、侵于之疆、則取于殘、殺伐用張、于湯有光」の二十字であった。閻若璩は、その著の第五十二「言以『管子』引『泰誓』史臣辭為武王自語」で、この『孟子』の文を、『泰誓』の偽作者が武王の発言と誤解したと告発した。章炳麟の主張は、そうした非難が的外であることを示す。彼によれば、『泰誓』のこの件は、武王ではなく、文王の革命戦争の記述であり、「侵于之疆」の四字は、殷の畿内に兵を進めたことを描写したものである。

このように述べた後で、章炳麟は、彼の議論の核心である文王受命説を展開してゆく。

殷は初めて周を名指しで非難したが、そこには責任逃れの遁辞があった。紂を征討せよという命令は、魏を占領した後に出された。自分は動かずに征討の命令を出しても、諸侯は耳を傾けないだろうし、民衆も心を動かされないだろう。紂王に恭順の意を示しても虚しく、これまでのやり方を改め、民衆の希望に従うことにした。黎の際に乗り、次いで邶を伐った。黎から東南に行くと朝歌に着き、邶から東北に行くと朝歌に着く。どちらも三百里に満たない。

軍隊は王畿に入ると、容赦無く紂王の兵を斬首し、紂を敵とする姿勢を鮮明にしたから、その勢威の赴くところ、王を称することは必然だった。（『大戴礼記』の『逸周書・少間篇』に、「遂に天命を受けて、物を作り、天を祭り、典を整えた」とあるのは、このときのことだ。『逸周書・酆保解』には、「九州の諸侯は、みな周に靡いた。周公旦は手を合わせ、額を地に着け、こう述べた。商は無道であり、徳を捨て、無辜の民を罰し、群臣を欺いたため、民衆は苦しみを嘗め、忍辱（「忍辱」の上に脱字有り）の試練を味わっている。諸侯のこの上なく大事な綱領も滅びた。紂王という亡人は凡庸極まりない。一方、我が文王は徳を祀り、礼を極め、義を明らかにしているから、我が卑位に二心を抱くことなく（二とは、爾の心に貳^なうことなかれ、の「貳」であり、西伯の卑位に貳心を持つなどという意味。文王が速やかに王権を施行することに賛意を表した）、温和な表情と良き誉れを結び付けよ。王はここに三公、九卿、そして全ての民衆に命ずる」とある。商の罪を列挙し、三公九卿も在席していたから、このときに王を称したことが知られる。〔9：67〕

現代の「夏商周断代工程」（一九九六～二〇〇〇）に基づく古代史年表は、紂王が西伯を捕囚から解き、征伐の権限を与えた前一〇五七年を、文王紀元の元年とした。³³しかし章炳麟は、西伯が崇侯虎を伐ち、諸侯と民衆に号令をかけ、豊邑を建てた前一〇五二年をもって、文王の受命と即位の年と看做すのである。しかし、紂王の在位中に文王が即位すれば、二つの紀元が併存することになる。そのような事態が理想的な古代にあったはずはないという意見は根強かった。そうした意見を取り上げ、章炳麟は次のように論評する。

孔穎達の『正義』は、張守節の『史記正義』を引いて、紂王が下野しないときに西伯が王を称したのは、「天に二日なく、土に二王なし」（『礼記・曾子問』）という原則に反すると疑義を唱えた。東晋の梁肅以下の人々もこれに従ったが、紂王の在位中に文王が王を称するのは、後漢が始まるに際し、淮陽王劉玄による更始の元号がまだあったとき、光武が帝王を称したと符合するのを知らない。文王が王を称さないまま、兵を王畿に進めることは、重大な手続き違反ではないだろうか。手続きに違反しながら、紂王になお偽りの忠誠を尽くし、その顔色を伺って、恬然と恥じるところがない。これは東晋の王敦や唐末の李茂貞がやったことである。論者は、文王を光武に比定するのを嫌がる一方で、文王を王敦や李茂貞の輩にまで貶めて平気である。取るべきものを間違えてはいないか。『論語・泰伯第八』に基づいて、文王は紂に服し仕えたと考えるに留まり、九州の諸侯に命を發したのは、同じ『論語・泰伯第八』に云う、天下の三分の二を握った以上、事を過たないと考えたためであることを判っていない。『康誥』が、「天はここに文王に大命を下し、戎たる殷を滅ぼし、天の命と殷の邦と殷の民を受け」とあるのは、鬼神に約束したのか、それとも人民に約束したのか。人事で確認できるのは、黎を討ち、邶を伐った後に、受命して、殷を撃ち、その国と民を奪い、その人民を臣下としたことではないか。王を称して何が問題だろうか。〔9：7〕

文王は黎を伐つ直前に、天下の三分の二を支配していたという『論語・泰伯第八』の記述は、章炳麟の議論の重要なポイントである。それは、孔穎達『尚書正義』卷十「西伯戡黎」第十六に引用されてもいた。

章炳麟の文王受命論を支えるもう一つの材料は、『三朝記』である。『三朝記』とは、哀公と孔子の問答記録で、今は『大戴礼記』に収録される。「説西伯戡黎序」が引く『少閒篇』も、その中の一篇である。『漢書・芸文志』の「論

語十二家」の項に、『三朝記』七篇として紹介される。章炳麟は早くも一八九一年に、『七略別録佚文徵』の中で、『三朝記』の由来を論じ、『漢書・芸文志』の他に、『史記・五帝紀』索隱、『蜀志・秦宓伝』の注、『芸文類聚』十五を参照していた。〔1:328〕彼は壮年期に『廡書』を書いて以来、孔子の足跡を追うさいの重要史料として、この『三朝記』を縦横に活用してきたのである。

章炳麟にとって、『三朝記』は漢代以前に現れた最古かつ最重要な孔子語録の一つであったのだ。それは『国故論考』の「明解故上」が述べた「書伝」の一つでもある。袁世凱の厳しい監視下に置かれた一九一四年、彼は『荊漢昌言・区言一』という随想録を書いたが、そこにある次の件が『西伯戡黎』の考察の延長にあることは容易に見て取れるだろう。

西伯が受命して王を称したことは、太史公の『史記・周本記』に見えるが、唐の梁肅は、『論語・泰伯第八』に、「天下を三分して、その二つ分を持ち、殷に服し仕えた」とあるのを理由に、受命の事実を否定した。言論がさまざまに飛び交う中、聖人はその中間的で穏当な表現を採った。『魯詩』、『尚書大伝』、『小戴礼記』などの文が、それである。周と漢の間の儒者が書いたものに相互に矛盾した内容が含まれているのは別にして、『論語』だけは真正の孔子の書物であり、『三朝記』もまた真正の孔子の書である。『三朝記・少間篇』は、次のように述べる。「紂が先王の明德に従わず、穀物を食べる民も滅亡の瀬戸際に立たされたので、周昌は諸侯に覇を唱えて、紂を補佐した。紂は、諸侯が周昌の言うことを聞くのが面白くなかったので、周昌は死に追い詰められたが、讓歩して崇、許、魏を伐ち、天子に仕えた。文王は遂に天命を受けて、物を作り、天を祭り、典を整えたのである。」ここに、「諸侯に覇を唱え

て、紂を補佐した」とあるのは、『論語・泰伯第八』に言う、「天下を三分して、その二つ分を持ち、殷に服し仕えた」を指し、「死に追い詰められた」とは、美里に幽閉されたことを指し、「天命を受けて、物を作り、天を祭り、典を整えた」とは、受命し王を称したことを指す。従い仕えたことが先で、王を称したことが後だが、そのいずれか一つを取り上げ、もう一つを疑うことはできなご。[7: 124-125]

章炳麟が、文王受命説を主張した重要な拠り所は、『三朝記』の記述であった。文王が紂に「従い仕えた」とことと、「受命し王を称した」ことの、いずれか一つを廃することはできないと、彼は述べる。『尚書』の出来事の信憑性を判断する手掛かりは、孔子の言行録（『書伝』）の中にしか求められないのである。

十二 周公は摂政として王を称したのか

「尚書統説」には、文王受命説と並んで、周王摂位説に関する見解も披瀝されている。それが、『金縢篇』は成王が周公を疑ったものであること」という題名を持つ『金縢』論である。

『金縢』の物語は、三幕に分かれる。【第一幕】武王が殷を滅ぼしてから二年後に発病した。周公は先王に祈禱を行い、自分を武王の身代わりにするよう求め、その祈禱の祝冊を、金縢で嚴封した櫃の中に入れた。翌日、武王の病氣は癒えた。【第二幕】武王が死去した後、成王が位を継ぎ、周公が摂政となったが、三監が流言を撒き、周公を中傷し、殷の遺民と結託し、周の王家に叛いた。周公は東征して、その乱を平定した。【第三幕】乱の平定後も、成王の

周公への疑いは消えなかった。ある日、金滕の中の書を読んだ成王は、周公の忠義の心を知り、自ら周公を出迎え、それまでの蟠りを解く。ちょうど秋の収穫の季節であった。

『金滕』に関する経学史の議論は、摂政となった周公が王位を篡奪する野心を秘めていたか否かをめぐって戦わされた。章炳麟の考察は以下の通りである。

【考察1】君主が没すると、百官は冢宰ちやうさいの指示に従う。これが古代の常法で、周公もそうした。管叔と蔡叔も異議を唱えず、成王も初めは疑わなかった。それが疑うようになったのは、武王の一言への誤解からだ。『逸周書・度邑解』には、こうある。「武王が、『且よ、これからは我ら兄弟が続けて王となるのだ』と言うと、叔且は恐れ、拱手して拒んだ。」「逸周書・武微解け』には、武王が夢で、金枝で書かれた『郊宝』と『開和』を出し、仔細に確認した後、周公且に後を継ぐよう命じ、太子（後の成公）に復唱させたとあるが、この処置は前例がなかったため、人々の疑いは晴れなかったのである。（中略）

『尚書』を説く者は、太史公以外にも、罪人を捕縛したことで周公が王を僭称するという流言が起ったと考える。殷を伐ち、管叔と蔡叔を捕らえたために、そうなったとは考えない。だが、こうした考えは『逸周書・作雒解らく』の記述と合わない。³⁴ 罪人を捕縛し、すぐさま鎬京に引き返して、『大誥』を作ったとも言われるが、³⁵ 軍を率いる身でありながら、身軽に場所を移動できるはずがない。『金滕』が、「周公はここに太公と召公に向けて、私が摂政に就かなければ、先王に報告する術がないことを告げる」と書いたのも、流言が起こるのを促したと思われる。『大誥』には、「今や動きがあり、朕は、おまえたちと大々的に東征を行う積りだ」とあるから、三監の叛乱の情報が入ってか

ら、急いで諸侯を率いて征討に赴くまでは、せいぜい数か月が出来事で、数年に亘るようなものではなかったであろう。『逸周書・作雒解』によれば、武王はこの年の十二月に崩じ、その葬儀は明くる六月、その間に七か月があるから、流言と征討は連続して起こったのである。『帰禾』、『嘉禾』の二篇が出来たとき、『書大序』によれば、周公は東に進軍中で、成王はまだ周公の忠義に気付いていない。これらが書かれたのは、成王がどういう反応をするか様子を見るためのものである。³⁶そこで、このやり取りを称賛する者は、周公を指して、仮の王を称して政治に臨んだと見る。周公は天子（成王）の命令を受け取ったのだから、疑いは十分に晴れたと。しかし、まだはつきりした形では表明されず、金滕が開かれるまで、疑いは残ったのである。

【考察2】『嘉禾』に関する『書大序』は、天子の命令を受け取ったのだから、周公は王位には就いていなかったと言い、『詩経・豳風・破斧』^{ひんぷう}は、周公が東征したさい、時の人々は、彼を王と呼ばなかったとある。けれども、『逸周書・明堂解』には、武王が崩じて、成王が継いだが、幼弱で天子の位を踐めなかつたと言う。³⁷周公が摂政として天下に君となり、六年にして叛乱を鎮めて、天下は大いに治まったと言う。ここには、摂政と大書されているし、天下に君となる者に、王権は備わると書いている。しかも、要所要所で、王命を称して衆に臨んでいる。だから荀子は、周公が成王を退けて武王を継いだと述べたのである（『荀子・儒効篇第八』）。これは『逸周書・明堂解』に基づいて言われたものだ。古書がその概要を引用して、細かい名称の違いに拘らない様子は、以上のごとくである。また『雜詁』が成王の語を記して、「予小子其退、即辟于周（私のごとき年端にゆかぬ者は鎬京に退き、周の王位に就きます）」と書くから、まだ即位してはいないと思われ、成王自ら戯れ言を送ったのである。『漢書・律曆志第一上』は、周公七年を書いてから、成王元年を書くが、これは同書の『十二諸侯年表』の、共和紀元の例に倣った結果である。

しかし『逸周書・周書序』には、「武王が没して、成王元年（武王既没、成王元年）」とあるから、周公には紀元がなかったことになる。共和では紀元なしでは済まされぬが、周公では紀元を得られないためであった。宋代の儒者が、周公は摂政に就かず、王命を称して衆に臨んだこともないと言うのは、事実を抹殺すること甚だしい。君主が没して冢宰が摂政に就く制度は、康王の即位後に廃された。君臣間の猜疑に懲りたためである。だが、大臣を受け継ぐ制度は残り、後世に何度か復活したことがある。しかし、それは周公の事例とは無縁である。『大誥』に「王若曰」と書き、『康誥』では、「孟侯（康叔）よ、わが弟よ、若き諸侯よ」と唱えはしたが、自分が王に代わる言葉とはしなかった。後世ではあり得ないことである。[9：10-12]

【考察1】の要点は、武王が死んでから半年の間に、周公に対する疑惑が生まれ、次いで周の内乱が起こり、周公が東征の軍を興したと述べる点にある。成王はこの間、即位していないというのが、章炳麟の主張の骨子である。『逸周書・明堂解』に、成王が幼弱で天子の位を踐めなかつたと書くのを根拠とする。また、この『逸周書』の史料を基に、周公が成王を退けて武王を継いだ、という大胆な説を唱えた『荀子』の文章も念頭に置かれている。だが、これは、現代の歴史学の観点から見ればあり得ない解釈である。

武王が死んで、その葬儀を待たずに成王が即位したことを、各史料は明記する。『史記』や『逸周書』の紀年の記事は、全て武王の死後を成王元年としている。武王は結局、自らの元号を持たなかつたわけだが、それが果たして、王国維が述べたように、殷の制度を踏襲した名残であったか否かは、差し当たり大きな問題ではない。³⁸ 成王元年という紀元が動き出したのに、成王は実際の皇帝権を行使しなかつたという章炳麟の主張が問題なのである。

彼は、自分の考えに説得力を持たせるため、【考察2】で誠に奇妙な解釈を持ち出している。成王と周公の二重統治体制は、後の共和時代に相当するものである。この共和時代から、中国史の公式の紀元が始まった。それより三百年前の成王や周公の時代に、必ずしも紀元は必要ではなかった。周公が独自の紀元を持たなかったことは、彼が事実上の王者であったことと何ら抵触しない。

【考察2】はさらに、『帰禾』、『嘉禾』の二篇を、武王が逝去してから七か月の間に書かれたものと看做し、『大誥』、『康誥』の二篇の時代を、もっと後の三監の乱平定の後に置いた。だが、周公の六年に亘る摂政政治を描いたこれら諸篇について、『書大序』の情報には誤りが多い。それらが実際に書かれた順序は、むしろ、『大誥』↓『康誥』↓『帰禾』↓『嘉禾』であったと考えられる。『帰禾』、『嘉禾』の二篇において、周公が成王に臣下の礼をもって臨んでいるのは、成王の王権が確立した事態を受けた態度表明である。しかしながら章炳麟は、周公がわざと臣下の礼を取って、成王の反応を確かめたのだと述べた。どれを取っても首肯することは到底できない新説であった。

一九一一年に、簡朝亮の『尚書集注述疏』を影射史学の典型として非難した章炳麟は、古典の研究に現代政治の利害関係を持ち込まないことを誓ったはずである。しかし、『金縢』の解釈において、摂政であった周公が同時に王者でもあったことを強引に論証しようとした態度の裏には、民国建国後の政治の混迷が投影しているのを認めざるを得ない。革命三尊の章炳麟は、辛亥革命を主導した同盟会が国民党に改組した後、訓政政治を提唱し、共産党と合作するのを受け入れることができなかった。そして、旧体制の軍人であった黎元洪が、民国政治の混迷を切り開くことを期待した。黎元洪の失脚後は、北京政府に対抗する聯省自治運動を推し進め、南方六省の聯合に奔走した。国民党が北伐戦争を始めると、上海を拠点に、北京の張作霖と共に北伐軍と戦った、反共主義者の孫伝芳を支持した。袁世凱

に始まり蒋介石に至る、時の指導者たちと常に距離を置き、対抗勢力の組織化を目指した章炳麟の戦略は、紀元を持たない周公、王位なき王権を求める闘争であったと言うことができる。周公は摂政であると同時に王者であるという彼の言説は、意識するとしないうにかかわらず、民国政治の暗喩として機能する他はなかったのである。

十三 『古文尚書』の偽造者は鄭冲である

一九二二年に洛陽から発見された「三体石経」は、晚出書の偽作問題を再考する手掛かりを章炳麟に与えた。「三体石経」の発見後、弟子の呉承仕との書簡のやり取りの中で、章炳麟は、『国故論衡』で明らかにした、「故」から「伝」へという『尚書』成立史の仮説は不十分であることに気付いた。『尚書』は、「故」から「伝」へという二段階を踏んで出来たのではない。「鑑識」、「隸写」、「积文」という三段階を経て生まれたのである。そして、この三段階を踏まえながら晚出書を偽作したのは、東晋の元帝にこの書物を献上した梅賾ではなく、梅賾の学統の三代前に当たる鄭冲という『尚書』学者だった。一九二四年一〇月一四日、章炳麟はこの着想を初めて呉承仕に告げた。

『三体石経』と比べれば、偽古文の書体は遥かに多いが、それら書物は鄭冲の手になると思われる。冲は魏の文帝の初めに仕出したから、『石経』が出土したころ、それを見える機会があり、『石経』を真似て偽物を作ったのである。だから、後で梅賾がこの書物を東晋の元帝に献上しても、誰も怪しむ者がなかった。段玉裁は『三体石経』を見ることができなかつたため、『古文尚書撰異』の「序」で、「当時は馬融と鄭玄の整理した古文がまだあつたのに、ど

うして、理解に苦しむこんな偽物を作つて、人々を惑わしたのだろうか」と書いたが、今にして思えば、馬融や鄭玄が古文と称したものは、本文にも異体字が多かつたから、訓読した後の文字であつたのは間違いない。原本であれば、孔壁書に基づく限り、字体の差異が生じるはずはないからである。当時の経の説き方は、宋の人々が鐘鼎を鑑識するやり方に近いものだった。まず模写し、次に真本を作り、それから釈文を施す。罫紙の行款は違つても、この三段階は必ず経ている。模写によつて孔壁書を写し取る。真本とは、自分の判断で訓読した本である。釈文とは、自分の考えで施した注釈である。だから、馬融や鄭玄の本で『經典釈文』に掲載されたものはすべて訓読した本であつて、孔壁書をそのまま写し取つたものではない。東晋のころには、馬融や鄭玄が模写したのも失われてしまつたら、彼らが訓読した本が決して真正の孔壁書ではなかつたことは明らかである。〔12：442-443〕

鄭玄は『古文尚書』の真本を見ていた、というのは章炳麟の年来の主張であつたが、「三体石経」に触れた後、この確信はかなりぐらついている。その一方で、彼がここで披露した着想は、呉承仕との議論が深まるにつれて、晩書の真偽を見分ける方法論にまで昇華されてゆくのである。最初の着想から二か月後の一月二六日、章炳麟は、孔壁書、伏生『尚書大伝』、晩出書の三つに書かれた文字は一体、何なのかという問題の探究に向かつた。

昔の伝注本は経文とは別に作られ、古文家が一経を伝授するに当たつて、全部で三部が用意された。これは近世の鐘鼎を鑑識するやり方と同じである。古文の原本を、師匠に従い模写するのは、鑑識を模写する行為に等しい。その時代の文字で写し取る作業も、鑑識家が今の隸書で写すのと変わらない。そこに、自分で伝と注を書く。これが鑑識

の釈文である。ただ、鑑識では一書の中に、この三つが全部揃っているのに、経の筆写では、三つの別々の書が出来てしまふのが違っている。伏生の『尚書大伝』は昔の竹簡に書かれ、それを伝授する学徒がいなかったもので、伝授されたのは、今字（隸書）で写し取った写本だけだった。孔安国『伝』も竹簡に書かれ、宮廷の秘府に保管されたさうい、古文を模写した写本と、今字（隸書）で写し取った写本の二つが保存されたのであった。[12: 446]

したがって、書物の歴史を遡ってゆけば、古文と今文とはいずれも古文で書かれたことが分かる。漢代に伝授された写本を、古文家の方は原文を模写し、今文家の方は今字（隸書）で写し取ったので、一緒にすることができなくなった。全く同じ古文の經典について、諸家が写した文字はさまざまだったから、その訓読も違ってきたのであって、原文が異なるわけではない。『經典釈文』が書く通り、「某家が某者を作った」のである。馬融以前は、経の本文と伝注は分けて書かれたお陰で、経文と訓読文の違いははっきりしていた。しかし鄭玄になると、自分の判断で経文を変え始めた。（『周礼』が言う、「故書のAはBに作る」という解釈の仕方だが、Aは経文の旧本であるが、Bは鄭玄が改訂した文字である。）以上から明らかのように、古文は、鄭玄に至って、今文だけでも言って良い状態になってしまったのである。漢が衰退してから、儒者たちはさらに安易に流れた。鄭玄の学生たちは、師が改訂した本だけを学び、鄭玄が模写した原本を置き去りにした。以後、今文と古文の学説が生まれたが、文字に今文と古文の区別があつたわけではない。ここに邯鄲の淳が伝授した古文を、碑石に刻んで、多くの人々の参考に供する必要が生まれ、『正始石經』が作られたのである。孔安国の古文『尚書』は、鄭冲が偽造したもので、冲は、魏の文帝が太子のとき文学の官位にあつた。西晋の泰始十（二七四）年に没した。何晏（かあん）『論語集解』（しつかい）の編集にも冲は参加しており、ちよう

ど『正始石經』が建立されたところで、冲はそれを実見していた。偽古文がこの『石經』文字を使っているのも不思議ではない。東晋のときの馬融、鄭玄の『尚書』は、今字（隸書）で書かれ、その真本の版下は失われたのに、偽書が『石經』と良く似ていたから、人々は馬融、鄭玄の本は真本だと思つたのである。後に東晋の范寧が、偽孔安国『伝』を今文に直したが、唐の衛包のときに、その孔安国『伝』の版下も失われてしまった。〔2：446-447〕

章炳麟のここまでの議論は完璧である。鄭冲は魏から西晋にかけての『尚書』研究者で、『三体石經』が建立されたとき、その地において碑石に刻まれた古文、篆文、隸文の三体をつぶさに研究して、それらの字体を模倣し、失われた孔安国『伝』の偽本を作つた。そして、彼の学統に属した三代後の梅賾が、東晋の元帝に、鄭冲の偽作を孔安国『伝』の真本だとして献上したのだ。

鄭冲を『古文尚書』の作者に比定するのは、章炳麟が初めてではない。閻若璩が先鞭を付け、あの時代の思想の首領、黄宗羲がその着想を高く評価していた。閻若璩は『尚書古文疏證』第十七「言安国古文学源流真偽」でこう書いている。

東晋の元帝のときに、汝南の梅賾が『古文尚書』を奏上したが、果たして安国が伝えたものであり、篇章の付け方も、題目の残り具合も、前漢や後漢のものとは全く違つた。梅賾はそれを臧曹（ぞうそう）に伝え、臧曹は梁柳に伝えた。皇甫謐（こうほひつ）も梁柳からそれを得て、自分の『帝王世紀』に載せた。梁柳から蘇愉に伝わり、蘇愉から鄭冲に伝わつた。鄭冲以後は、どうなつたか分からない。ああ！これらは本当に孔安国の元の本なのであるか。それとも、魏晋のときに仮

託されたものなのだろうか。³⁹

黄宗羲の「原序」はさらに明解である。「鄭玄がその孫の小同に伝えた」と、閻若璩は書く。鄭小同は鄭冲と共に高貴郷公に仕えたため、冲は『古文尚書』を教授することになり、その学統も絶えることがなかった。そうであれば、東晋の豫章内史の梅賾が孔安国の伝を得て、それを奏上したのは何故だろうか。⁴⁰

もつとも、閻若璩と黄宗羲の示唆になる、鄭冲を『古文尚書』の作者であると見る章炳麟の仮説には重大な欠陥がある。西晋から東晋への政権交代のさい、洛陽の都は異民族である匈奴に蹂躪された。後の元帝や梅賾も、東晋の建康に逃れ、『三体石經』を身近に見る環境は失われた。では彼らは、その後、鄭冲が偽造した文字の信憑性を何によって確かめたのであろうか。これは難問であった。章炳麟は考えを纏めるのに三か月を要している。呉承仕に手紙が届いたのは、年が明けた一九二五年三月五日のことであった。

永嘉の喪乱で、經典は揚子江を越えて南に移った。元の經の故書は亡び、隸書の写本のみが崇拜された。段玉裁は孔安国『伝』を古文と考えた。だが、現行の孔安国『伝』について言えば、東晋の范寧が今文に直し、唐になると古文が用いられなくなった。宋の開宝年間（九六八〜九七六）には『經典積文』も同じ運命を辿った。孔安国『伝』の真本を見た者はなく、後人が今文に改訂したものをそれに当てたに過ぎない。段玉裁は第一に、この点を見誤った。馬融や鄭玄の本はいずれも隸書で書かれたものが東晋に保管されたが、それらの故書が亡びても、馬融や鄭玄の本が孔壁書に基づいていることを、当時の人は誰も疑わなかった。現行の孔安国『伝』が古文で書かれていたならば、そ

これは馬融や鄭玄の本とはまるで違っていたから、人々に信じられることはなかったはずだ。これは物事が起こった順序を転倒した見方である。段玉裁が第二に見誤ったのは、そのことである。[12: 419]

章炳麟によれば、当時の人々は、『三体石経』の字体に対応する文字を知っていたから、鄭沖の偽書を信じたのではない。馬融や鄭玄が疏注を付けた今文で書かれた『尚書』と、鄭沖の書物が大きく違っていなかったために、それを信じたのである。洛陽の地から離散した後も、文化の記憶は馬融や鄭玄の書物を通じて担保されている、と人々は考えた。段玉裁は、そのことを十分に理解できなかった。しかし、これで問題が全て解決したわけではない。鄭沖と並んで何晏の『論語集解』の編集に参加した人物に王肅がいる。この王肅を、晚出書の偽作者に比定する見解は、昔からあった。ならば、鄭沖を偽作者とする意見との優劣が問われることになるであろう。章炳麟は同じ手紙の中で、さらに推理を巡らす。

王肅の学説は、孔安国『伝』とは同じところも、違うところもある。鄭沖は、魏のとき何晏『論語集解』の編集に加わったが、世に伝わらなかつた孔安国の『論語訓説』も、そこで初めて『論語集解』に収録された。『論語訓説』は、『尚書大伝』と並んで、鄭沖が偽造したものかもしれない。沖は当時、最高齢で、東晋まで生きて三公となった。『三体石経』の建立は鄭沖が実見したものである。この碑石から多くのヒントを得たのは疑いない。王肅は甘露元(二五六)年に没したが、やはり『三体石経』が作られた後である。『論語集解』は王肅の学説を多く引く。それは王肅が鄭沖よりも年配であつたからで、同じ理由により、孔安国『伝』にも王肅の考えが取られることが多いのであ

る。王肅は賈逵^{かき}や馬融に好意的だが、鄭玄を批判した。現行の孔安国『伝』で、馬融を退け、鄭玄を探るところは、鄭冲が作った部分ではないだろうか。[2: 449-450]

『論語集解』での引用数は鄭冲より王肅の方が多い。孔安国『伝』の内、鄭玄を探る部分は鄭冲の、それ以外は王肅の手になる。晚出書の偽作者として、両者は優劣がつけ難い。『尚書』の個々の作品に照らして、偽作者がそのどちらであるかを特定する他はない。例えば、章炳麟が『泰誓故』に淵源を持つと考えた『泰誓』を、晚出書の一編に数えるか否かは、経学史の懸案事項の一つだった。逆に言えば、『泰誓』の偽作者を鄭冲か王肅のいずれかに同定できれば、晚出書が『泰誓』を含むか否かの問題は、自動的に決着が着く。章炳麟は『国故論衡』『明解故上』において、「書伝」という概念の下に、『泰誓』を古代思想史の起源に位置付けたが、今度は、『三体石経』によって、『泰誓』が晚出書に属するかどうかの定論を得ようとしたのである。一九二五年四月三日の書簡は、こう述べている。

(鄭冲が、) 文字を古文に合わせ、訓を賈逵や馬融に真似て、人々に疑念を抱かせないよう腐心したのは、魏には碩学が多く、彼らを騙し通すのが難しいと考えたからである。孔安国『伝』には二十五篇があったという事実も、偽書を作る上での障害だった。東晋になると、冲は太保から太傅に昇進し、その威望は時人を遙かに超え、碩学もほとんど世を去っていた。冲は少しずつ頭角を現した。東晋の初めに六宗^{りくそう}を議論したこと⁴¹について、宋の司馬光は孔安国の学説によってその誤りを指摘した。だが、冲はまさに孔安国を引き合いに出して礼を定めたのであり、皇帝の司馬彪はその文章に即して議論しただけで、孔安国『伝』を直接見たわけではなかったと思う。冲が伝授した書は、その

先生である蘇愉や梁柳の狭いサークルの中でだけ回覧されたから、『春秋経伝集解』を書いた杜預トコでさえ、その書を見たことはなかったであろう。皇甫謐が、梁柳のところを得た五十八篇の古文尚書を、『帝王世紀』を書くさい盗用したのは、当時、墓から出てきた『汲冢書』が『周書』の一部だと信じられていたからである。したがって、その五十八篇に『五子之歌』が引かれるのは思慮に欠けた人の改竄であるというのは間違いだし、それが学官に立てられたというのは、もっと馬鹿げた説である。李颯リサク『尚書集注』が孔安国を引いて、『泰誓』は後から得られたものだと説いたのは、鄭冲の古文『尚書』が旧来の本文を用いたからであり、現行の孔安国『伝』の中の『泰誓』のみが、梁柳か臧曹かのいずれかが偽造したものであったためである。大胆に推理すれば、邯鄲の淳が魏の世では最長老であり、孔壁書の古文は、淳のみがその文を綴ることができたに過ぎないから、孔安国を偽造する者は『三体石経』に範を取って、信を繋つながざるを得なかった。けれども、『石経・尚書・泰誓』⁴²にしたところで、後から得られた漢代の三篇に過ぎず、それらは『史記』にも記録され、今文の字体とも大きな違いがなかったので、鄭冲は新たに偽造しようがなかったのだ。また『堯典』を、今の『堯典』と『舜典』に分割したものの、「慎微五典」より前の部分は一文字たりとも改竄することができなかった。いずれにおいても、鄭冲の狙いは変わらない。彼が『泰誓』を偽造したのは、後に姚方輿が『舜典』を紛れ込ませたのと、やり口は同じである。梁の武帝が、姚方輿の書を信じなかったため、二つの『泰誓』が併存することになり、偽造の企みが見破られたのである。二十五篇の『古文尚書』が偽造できたのは、このとき、その書物がなかったからであって、『泰誓』があったためではない。西晋が匈奴に追われ、揚子江を渡ることがなければ、人々は『三体石経』にいつも触れることができたわけだから、嘘の『泰誓』は流行しなかっただろうし、偽造された『舜典』の二十八字も出ることにはなかっただろう。西晋の渡河を鄭冲が予測できなかった以上、彼

が自分で自分の首を絞め、人々の指弾を受けるようなヘマをするはずはなかった。したがって、鄭冲の手になる『泰誓』や孔安国『伝』は、現行の孔壁書ではない。卑見は以上の通りで、¹⁾ 批正を乞う。〔2：452-453〕

章炳麟の意見は目まぐるしく変わっている。鄭冲が偽造したのは二十五篇だと言っていたのが、鄭冲が偽造した『泰誓』は、その二十五篇の晚出書には含まれず、旧来の本文を用いたものであると主張し始めた。先には王肅との共著だと述べていた孔安国『伝』も、再び鄭冲の作品であると言われる始末である。しかも、それは現行の晚出書とは別物だと云うのだから、これまでの議論は振り出しに戻ったことになる。仕切り直しの議論はさっそく、明くる四月四日になされている。

章炳麟は、東晋の初めの六宗の議論に関する自説を修正した上で、鄭冲が『古文尚書』を偽造したのは確かであっても、現行の晚出書は鄭冲が作った偽物ではないという、新たな仮説から議論を始めた。

偽書の『舜典』一篇は、梅賾が献呈したとき、孔安国『伝』を欠いていた。司馬彪は、孔安国を引いて六宗の祠の意義を話したさい、自分の考えでそれに反駁したのだ。昨日送った手紙に、鄭冲が孔安国を引いて礼を説いた後で、司馬彪がその文書に基づいて反駁したと書いたのは、だから、事の由来を良く考えない議論だった。梅賾が献呈したとき、『舜典』に孔安国『伝』がなかったのは、鄭冲が司馬彪に論破されたため、自ら進んでそれを削除したからではないかと思う。

李頤が漢代の『太誓』に注をつけた中で、孔安国の解釈に言及したのは、鄭冲の原書が『太誓』の旧本を使ってい

たからであるに違いない。だから、現行の孔安国『伝』は、鄭冲の弟子の梁柳以後に書かれたものと言えよう。漢と魏の間にあつて、『太誓』は、馬融や鄭玄に疑いを持たれながらも、『石経』や今文の形で残っていた。漢初の婁敬や董仲舒も、それを引用した。鄭冲は経の本文に習熟し、儒術百家の言を極めたと言われる（唐代編集の『晋書・列伝第三』）から、軽率な改訂を加えて、人の疑いを招くようなことはしなかった。また、漢代の『太誓』が南朝の斉や梁に伝わると、梁の武帝が、東晋に献上された梅賾の晚出書とそれまでの『太誓』を併用して、「古文の『泰誓』は紂王征討を言い、今文の『泰誓』は武王觀兵を言う」と説くに至つた。この梁の武帝の考えは、孔穎達の批判を受けている。（『泰誓正義』¹³）ただし、孔穎達が『尚書正義・序』で、「まず張霸の輩が『泰誓』を偽造し、壁に埋蔵して後から発見されるようにした。今の『泰誓』は、確かに『尚書』百篇外のものには違いないが、『周書』に分類するなら、実際に武王は觀兵の誓願をしたことになる。ただ、今の『尚書』には収録されていないが、『周書』に書いたことから判断すると、梁の武帝と同じ考えだったのである。孔穎達は、梅賾の晚出書を信じていたものの、漢代の『太誓』を否定するには証拠が不十分だったのである。鄭冲が魏の末期に大胆な改竄を行おうとしなかったのは、ここから明らかであろう。ゆえに、偽古文の二十五篇のうち、二十二篇は鄭冲の作品で、『泰誓』三篇は彼の後の人々が偽作したものである。二十五篇が偽書であると考える者は、斉や梁が学官を立てる前から、多くいた。例えば、『雒繇謨』を『益稷』と題し、益稷には触れても、棄稷について語らない点などは、ずいぶんと疑われたものである。また、二十二篇の中の『武成』の出来事は、時間の順序が逆になっている。（『正義』は錯簡を疑う。）『旅獒序』について、馬融や鄭玄が「獒」を「豪」と訓じ、「酋豪」と注したのは、『旅獒』の本文を見て、そう書いたに違いないのに、孔壁書では、「獒」を「犬、高さ四尺」と注しているのである。こうした例は、鄭冲の学問が不十分で

あつた証拠である。最も甚だしい矛盾は、『論語・堯曰第二十』の「予小子履」で始まる四十五字であろう。何晏の『論語集解』が孔安国を引いて、「これは湯王が桀を伐つことを天に告げるものだ」と説明するが、『墨子・兼愛下』が『湯誓』を引用する件は、確かにこの「予小子履」で始まる四十五字と同じである。けれども、この語は、晚出書では『湯誥』に入っている。『湯誥』は『湯誓』とは違う文章である。『湯誥』は、湯王が夏を退けて毫に帰還する物語で、桀を伐つことを天に告げる『湯誓』とは時期が異なる。「予小子履」を『湯誓』の一節だと述べる『論語訓』も、孔安国『伝』に収める『湯誥』も、いずれも孔安国の作品なのに、言っていることは、これだけ相互に矛盾するのである。小生は『論語訓』が鄭沖の偽作だと述べたが、『湯誥』はひよっとすると、鄭沖の作品ではないのかもしれない。『尚書正義・湯誥序』で、皇甫謐が『湯誥』を引いているのは、梁柳の偽作である証左かもしれない。だから、偽書が初めて出たとき、二十五篇はまだ揃っていなかったと貴兄が考えることには、別の可能性も考えられなくはないが、少なくとも、『泰誓』の諸篇が、梁柳、臧曹、梅賾といった無学な輩の仕業に成り、鄭沖の自撰でないのは、ほぼ確実であろう。

炳麟 白

四月四日〔12：454-455〕

鄭沖は『古文尚書』の二十二篇だけを偽造した。十分な学力がなく万事に慎重な彼には、『泰誓』の三篇をでっちあげることは無理であつた。『泰誓』を作ったのは、彼の学統を受け継ぐ後代の仕業である。梁柳ではないか、と章炳麟は推測したが、手紙の最後は、梁柳、臧曹、梅賾といった無学な輩を、まとめて容疑者に行っている。『古文尚書』

は鄭沖が偽造したという仮説から始まった議論は、右へ左へと迷走した挙句、『泰誓』に関する意見を修正した以外は、その最初の仮説を再確認するに終わった。

十四 偽作と中世哲学

以上の呉承仕とのやり取りの成果を、章炳麟は『太史公古文尚書説』で公にすることはなかった。代わりに、次のような付記を書いた。

段玉裁は、孔壁書の中の『書序』にも古文と今文があると書いた。だが、孔壁に、それらはあつたかもしれないが、民間にはなかつた。『逸周書』十六卷に師説と言えるものがないのと同じだった。ならば、馬融や班固は、どこからそれを採録したのだろうか。馬融や鄭玄は、どうやってそこに注を付けたのだろうか。また、学識を欠いた張覇は、どうやって百篇の『尚書』を百二篇にしたのか。劉歆りゅうきんは「太常博士への書簡」において、『尚書』をもって完備したものと考える」人々を非難している（『漢書・楚元王伝第六』）。今文に『書序』があつたとしても、博士たちが狭量である限り、『尚書』が「完備したもの」であるはずはなかつた。その後、緯書が百二篇を『尚書』とし、その内、十八篇を『中侯』としたのは、張覇の学説に従つたもので、今文『尚書』の元の姿ではない。大史公は孔安国に学問を習つたので、その『殷本紀』に逸篇の『湯誥』を載せ、亡篇の『湯征（湯誓）』も採録した。けれども、『書序』だけ取らなかつたのは何故だろうか。班固の家系にも、宮廷から下賜された書が多くあつて、彼も古文を実際に

見たはずなのだ。それなのに、張覇の方が、班固よりも多く『左伝』を採録し、それが『書序』にも引かれているのはおかしくはないだろうか。『書序』は亡篇にも言及しており、馬融と鄭玄がそれに注を付け、存篇や逸篇についても多くの創見を出した。しかし、それは亡篇に訓詁を施したに過ぎず、彼らの本は消滅せんとする学問を復興したものであっても、完全な書物ではなかったのだ。『書序』が民間に残っていたれば、馬融や鄭玄の注は、こんなにも言いたいことが吐き出せないままではなかったはずである。段玉裁は大史公に難癖を付け、孔壁書がみな今文だと書いた手前、『書序』にも今文があると言わざるを得なくなった。誠に自己を欺くものである。馬融が『逸周書』十六篇に師説がないと述べたのは、前漢の杜林や衛宏が十六篇について何ら言及することがなかったために、後漢に生きた彼としては、そう言わざるを得なかっただけなのだ。しかし、孔安国が都尉の朝に伝え、朝が膠東の庸生に伝えた以上、前漢の哀帝と平帝のときに、師説はあつたはずだし、劉歆が古文『尚書』の学官を立てることを目論み、その「太常博士への書簡」で十六篇を話題としたときに、師説がないままで、学官を立てることを懇請したはずはないのである。〔7：256〕

『古文尚書』は前二六年からおよそ十年の間に、民間に伝承された膠東庸生の遺学から生まれたものである。しかし、今文博士の反対により学官に立てられることはなかった。西暦四年に、劉歆が『左伝』や『古文尚書』を学官に立てることに成功するが、王莽政権の没落と共に、再び廃された。以後、後漢から隋に至るまで、『古文尚書』は学界の謂れなき差別を受け続けた。

劉歆は、こうした前漢以来の学界の歪みを誠に適切な言葉で表現した。世の学者は、『逸礼』、『古文尚書』、『左

伝』の三学を抑え、『尚書』をもって完備したものと考え」たのは、何と悲しいことではないであろうか、と。(『漢書・楚元王伝第六』) 今文博士に対する劉歆の異議申し立ての核心は、『逸礼』でも『左伝』でもなかった。『古文尚書』を学官に立てるかどうかをめぐる闘争の中にこそ、漢から隋に至る学術史の本質がある。

『左伝』の学者で、『尚書』をずっと敬遠してきた章炳麟は、一九二二年、「三体石経」に出会ってからは、「三体石経」が出土した時代、つまり『古文尚書』が滅亡の淵からもう一度蘇った時代に向き合わざるを得なくなつた。『古文尚書』は、一体、誰が復元したのか。その偽作者を追跡する過程で、彼は、古代思想史の核心を解く鍵が、『左伝』ではなく、『古文尚書』にあることに、ようやく気付いた。『太史公古文尚書説』の後記が、「尚書」をもって完備したものと考える」人々を指弾した、劉歆の言葉を繰り返し引用したことに、章炳麟が古代学術をどう理解したかを理解する鍵が隠されている。

『左伝』研究から出発した章炳麟は、『尚書』研究者として生を終えた。なぜそうなつたかは明らかである。劉歆が『古文尚書』を学官に懇請した時代、その動きを妨げた今文博士たちの攻撃の対象は、『左伝』のように見えて、実際は『古文尚書』にほかならなかつた。漢代以来の学術の歪みは、『古文尚書』の生成の過程に反映されていた。「三体石経」との遭遇は、章炳麟を否応無しに、漢代に使われた『尚書』の書体への探究、当時の学術の歪みの加害者であり、また被害者でもあつた一群の偽作者たちの追跡へと向かわせた。

王肅、鄭冲、梁柳、臧曹に関する討論を通じて、章炳麟は、劉歆が「太常博士への書簡」で述べた悲しみを追体験した。彼は偽作という営みが、漢代以来の畸形的な学術の展開の必然的な産物であることを理解するに至る。

漢から隋にかけての学術に関する研究は、章炳麟が壮年期から強い関心をもつて取り組んできた課題の一つであ

る。『莊子』と唯識論を架橋したこの時期の傑作、『齊物論釈』（初定本、一九一〇年）〔6: 369〕は、外来思想である仏教に開かれたこの時代の、開放的で複層的な文化への圧倒的な共感に支えられた作品である。だが、「三体石経」という碑石の持つ硬質な手触りを知ってからは、この時代の學術の歪みと、その必然的な産物である偽作という行為が、これまでとは全く異なる相貌をもつて、章炳麟の前に姿を現わすことになる。

孔安国が『古文尚書』を献上したころ、民間にはまだ太古の「故」と「伝」の記憶が残っていた。しかし、「三体石経」が作られたとき、この記憶は跡形もなく消えていた。古代が終わり、中世が始まったのである。

中世は、文化の記憶を喪失した時代である。その喪失を、偽作という行為によってしか埋め合わせることができない悲しみの時代である。

章炳麟の遺作となった「中世哲学」は、かかる漢から隋にかけての中国思想が、他の全ての時代を超えて屹立する極北の姿を描いている。哲学に関して言えば、魏より後、『三国志』、『晋書』、『世説新語』に載せる諸家が老莊を論じ、儒術を論じた。中でも最大の作品は『列子』、偽『古文尚書』、『孔叢子』の三つである。⁴⁴ 偽『古文尚書』について、彼はこう述べている。

偽『古文尚書』は王肅の作品と思われる。『道術』の「人心惟危」に始まる十六字（『荀子・解蔽篇第二十一』）を改竄して、宋以後、朱子学を説く儒者たちがそれを金科玉条とした。『孔叢子』も王肅の作品ではないかと思われる。心の精神を聖と呼んだことは、宋の楊敬仲の注目するところとなった。王肅は中古哲学の一家たるを失わない。

〔11: 953〕

『古文尚書』の作者は、鄭沖ではなく、王肅に比定されている。一篇の偽作が、後の人々の思考方法を変えてしまったという事実を、章炳麟は今や肯定的に捉えようとする。それは、彼がそれまで私淑してきた清朝考証学の「科学精神」には劣るものかもしれない。しかし、後者が「科学」の仮面の下に虚無的な懐疑の精神を宿していたのとは相違して、偽作という胡散臭さの影に、輪廻の世界と極小の世界の両側へと拡がる起動力を秘めている。『古文尚書』を偽造したのが誰かは、もはや大きな問題ではない。その「中世哲学」を近代に架橋することが重要なのであった。長い学問探究の果てに、近代的思惟の向こうに広がる世界の扉の前に辿り着いた章炳麟は、その扉の前で六十七年の生を閉じた。

※章炳麟の文章は全て、上海人民出版社編『章太炎全集』全二十巻、上海人民出版社、二〇一八年より引用し、引用に当たっては略記号を用いる。例えば、[11: 85485]とあるのは、『章太炎全集』第十一巻（太炎文録補篇〔下〕）、八五四～八五五頁であることを示す。

- 1 姚奠中、董国炎『章太炎學術年譜』山西古籍出版社、一九九六年、四九二頁。
- 2 胡適『清代學者的治學方法』歐陽哲生編『胡適文集』第二冊、北京大學出版社、一九九八年、三〇二～三〇四頁。初出は『北京大學日刊』第九期（一九二一年四月）で、後、『胡適文存』一集卷二、上海亞東圖書館、一九二二年に収められた。
- 3 戴震撰、湯志鈞校点『戴震集』上編、文集三「与王内翰鳳喈書」上海古籍出版社、五三～五四頁。
- 4 梁啓超『中国近三百年學術史』梁啓超著、湯志鈞、湯仁沢編『梁啓超全集』第十二集「論著十二」中国人民大学出版社、二〇一八年、所収。
- 5 汪中「致劉端臨書之四」『文集』第五輯、汪中著、田漢雲点校『新編汪中集』広陵書社、四三五～四三六頁。これは阮元が刊刻した『述学』別録に「二十二与端臨書」と題して収められて以来、広い範囲で読まれた。
- 6 張岩『審核古文「尚書」案』中華書局、二〇〇六年、三五九頁。
- 7 孫星淵撰、陳抗、盛冬鈴点校『尚書今古文注疏』下冊「卷卅周書」中華書局、一九八六年、五九六頁。
- 8 「鄭云、『蔡讀曰豪、西戎無君名、強大有政者為管豪。國人遣其適豪來獻見於周。』良由不見古文、妄為此說。」孔穎達の『正義』は、こう書いて、鄭玄の解釈が古文を見ることができなかつたが故の誤解だと述べた。しかし閻若璩は、鄭玄が古文を見ていたと考えたのである。章炳麟もこの点に関しては、閻若璩の考えに従っている。
- 9 これは『正義』の以下の解釈を否定したものである。「魯語」稱、武王時、『肅慎氏來貢楛矢、石弩、長尺有咫。先王欲昭令德之致遠、以示後人、使永監焉、故銘其楛曰「肅慎氏貢矢」、以分大姬、配虞胡公而封諸陳。古者分異姓以遠方之貢、使無忘服也。故分陳以肅慎氏之矢。』是分異姓之事、禮有異姓庶姓、異姓、王之甥舅、庶姓、與王無親。其分庶姓亦當以遠方之貢矣。」
- 10 韋昭は、「肅慎、北夷之國、故隼來遠矣。傳曰、肅慎、燕毫、吾北土也。」と注しており、「東北夷」とは書いていない。
- 11 閻若璩撰、黃懷信、呂翊欣校点『尚書古文疏證附：古文尚書冤詞』上冊「第七十五言『旅獒』馬、鄭讀蔡曰豪、今仍本字」上海古籍出版社、二〇一〇年、二七一～二七四頁。
- 12 章炳麟著、徐復注『廬書詳注』上海古籍出版社、二〇〇〇年、九〇三～九〇四頁も参照のこと。
- 13 前掲『尚書古文疏證附：古文尚書冤詞』下冊、毛奇齡『古文尚書冤詞』卷六、八四六頁。
- 14 前掲『尚書今古文注疏』下冊「卷卅書序第卅下」五九六頁。

- 15 この部分は、孔穎達の『正義』の次の記述を強く意識している。「案『孟子』及『史記』稱瞽瞍縱火焚廩、舜以兩笠自扞而下。以土實井、舜從旁空井出、象與父母其分財物。舜之大孝升聞天朝、堯妻之二女、三惡尚謀殺舜、爲姦之大莫甚於此。而言『不至姦』者、此三人性實下愚、動罹刑網、非舜養之、久被刑戮、猶尚有心殺舜、餘事何所不爲。舜以權謀自免厄難、使瞽無殺子之愆、象無害兄之罪、『不至於姦惡』於此益驗。終令瞽亦允若、象封有鼻、是『不至於姦惡』也。」
- 16 前掲『尚書古文疏證附・古文尚書冤詞』下冊、閻若璩『尚書古文疏證』卷二、第十八「言趙歧不曾見古文」六六頁。
- 17 「馬、鄭、王本說『此經皆無』帝曰、『當時庸生之徒漏之也。鄭玄云、『試以爲臣之事。』王肅云、『試之以官。』鄭、王皆以『舜典』合於此篇、故指歷試之事充此『試哉』之言。孔據古今別卷、此言『試哉』正謂以女試之、既善於治家、別更試以難事、與此異也。」
- 18 前掲『尚書古文疏證附・古文尚書冤詞』下冊、閻若璩『尚書古文疏證』卷四、第五十二「言以『管子』引『泰誓』史臣辭爲武王自語』一四三—一四四頁。
- 19 『檢論』卷二に収める。同書は一九一五年に出版された。『尚書』故言』の執筆時期の確定は難しいが、一九一三年六月以前であるのは確実である。つまり、この文章は、『国故論衡』の先校本（一九一〇年）と校定本（一九一九年）を架橋する位置にある。『章太炎全集』第十五卷（演講集下）には、一九三五年から三六年にかけての講演録として、全く同じ文章（尚書故言）が収録される。〔15：619〔21〕〕
- 20 錢穆が的確に述べたように、『国故論衡』は中国伝統學術の總体的批判の書であり、「西歐化を目指した新文化運動とは違つた意味での」新文化運動を興起した。錢穆「太炎論學術」『中国學術思想史論叢』卷八、安徽教育出版社、二〇〇四年、三四二頁。
- 21 先校本（一九一〇年）と校定本（一九一九年）を比べると、後者に補筆がある。注が大幅に加筆されており、高弟の朱希祖と黃侃の著作が紹介されるが、論旨に変更はない。ここでは加筆後の校定本を用いる。直訳だけでは、とても意味が通じないので、記述の基になる大量の文献情報を補いながら、翻訳する。原注は省略した。翻訳に当たっては、章太炎撰、龐俊、郭誠永疏證『国故論衡疏證』中華書局、二〇〇八年、三三二—三三四頁の詳細な注釈を参照した。
- 22 『国語・周語下』の原文の句読は、「吾聞之大誓、故曰『朕夢協朕卜、襲于休祥、戎商必克。』」と切るべきである。なぜなら、その章昭注は、「大誓、伐紂之誓也。故、故事也。」とあるように、「大誓」と「故」を別々に説明しており、『大誓故』という一つの書物があったと考えていたわけではないからだ。それに、『周語下』が引く書物の名は『大誓』であって、『太誓』

ではない。

- 23 前掲『国故論衡疏證』三二九～三三〇頁を参照。
- 24 この書簡は後に「与劉光漢書（癸卯）」と改題して、『太炎文錄初編』巻二に収録された。〔8:148-149〕
- 25 前掲『国故論衡疏證』三三〇頁。
- 26 孫詒讓著、孫以楷点校『墨子間詁（上册）』巻四「兼愛中第十五」（中華書局、一九八六年、一〇三頁）は、「隧」を、畢元が挙げた、『穆天子伝』の「鉞山之隧」、「玉篇」の「隧、以醉切、掘地通路也」に従って訓ずる。
- 27 『漢書・酈陸朱劉叔孫伝第十三』に直接、『太泰誓』を引用した箇所はない。強いて探せば、婁敬が劉邦に語った言葉に、「成王即位、周公之屬傅相焉、乃營成周都雒、以為此天下中、諸侯四方納貢職、道里鈞矣、有德則易以王、無德則易以亡。凡居此者、欲令務以德致人、不欲阻險、令後世驕奢以虐民也。及周之衰、分而為二、天下莫朝周、周不能制。非德薄、形勢弱也。」とあり、この部分が、『泰誓中』の、「受有億兆夷人、離心離德。子有亂臣十人、同心同德。雖有周親、不如仁人。天視自我民視、天聽自我民聽。百姓有過、在予一人、今朕必往。我武維揚、侵于之疆、取彼凶殘。我伐用張、于湯有光。勗哉夫子。罔或無畏、寧執非敵。百姓懍懍、若崩厥角。嗚呼、乃一德一心、立定厥功、惟克永世。」に対応していると考えられる。
- 28 この書簡の日付は「一九〇九年」としか記されていない。
- 29 『太炎文錄統編』は、一九一九年に『章氏叢書』の浙江図書館刊本に収録されたが、そこに「尚書統説」は見えない。
- 一九二二年刊の題詞を付し、実際の刊行は一九三五年の同『統編』に初めて収録された。執筆時期は、『尚書』に関する彼の研究成果が続々と世に出た一九三二～三三年と思われる。前掲『章太炎學術年譜』二九六頁、四五四頁。
- 30 「昔者文王侵孟、克莒、舉鄆、三舉事而紂惡之、文王乃懼、請入洛西之地、赤壤之國、方千里以請解炮烙之刑、天下皆説。」
- 31 「孟を「邶」に当てる考えは、前掲『尚書今古文注疏』下冊「卷卅 書序第卅上」五八四頁で、孫星衍が表明したものである。
- 32 楊筠如『尚書覈詁』巻二「商書」「西伯戡黎第十」陝西人民出版社、一九五九年、一二一～一二二頁。
- 33 楊朝明『周公事績研究』中州古籍出版社、二〇〇二年、一八四頁。
- 34 『逸周書・作雒解』に言う。「二年、又作師旅、臨衛政殷、殷大震潰、降辟三叔、王子群父北奔、管叔經而卒、乃囚蔡叔于郭凌。」
- 35 孔穎達の『正義』巻十三「金縢第八」に、「武王既崩、管叔、蔡叔與紂子武庚三人監殷民者又及淮夷共叛。周公相成王、攝王政、將欲東征、黜退殷君武庚之命、以誅叛之義大誥天下。史敘其事、作『大誥。』とあるのを踏まえる。

36 これは章炳麟のかなり踏み込んだ解釈である。「書大序」の孔穎達の疏は、「歸禾」の成立年代は不明で、「金滕」の前後いずれにも書かれた可能性があると、次のように両論を併記した。「歸禾年月、史傳無文、不知在啓金滕之先後也。王啓金滕、正當禾熟之月。若是前年得之、於時王疑未解、必不肯歸周公。當是啓金滕之後、喜得東土和平而有此應、故以歸周公也。」（「正義」卷十三「微子之命第十」）

37 『逸周書・明堂解』は言う。「六年而武王崩、成王嗣、幼弱未能踐天子之位、周公攝政、君天下、弭亂、六年而天下大治。」『礼記・明堂位』にも同様の記述がある。「昔殷紂亂天下、脯鬼侯以饗諸侯。是以周公相武王以伐紂。武王崩、成王幼弱、周公踐天子之位以治天下。」

38 劉盼遂『觀堂學書記』「洛誥・王肇称殷礼」王国維『古史新証・王国維最後的講義』清華大學出版會、一九九四年、二八一頁。前掲『尚書古文疏證附・古文尚書冤詞』上冊、閻若璩『尚書古文疏證』卷二、第十七「言安國古文学源流真偽」五六～五七頁。40 同右、黄宗羲『尚書古文疏證原序』二頁。後に『南雷文定』三集、卷一に収められる。沈善洪主編『黄宗羲全集』第十冊（南雷詩文集）「序類」浙江古籍出版社、二〇〇五年、六三頁。

41 杜佑『通典』卷四十四「礼四 沿革四 吉礼三」に、「晋初、罷其祀。（時司馬彪表云「六宗之禮、不應特立。」新禮遂廢。）後復立六宗祀、因魏舊事。（時摯虞奏、『按舜受終、禮於六宗、漢魏相仍、著為貴祀。凡崇禮百神、放而不致、有其舉之、莫敢廢也。宜定新禮、祀六宗如舊。』從之。）とある件を踏まえる。『自定年譜』の「光緒十六年（一八九〇年）二十三歳」の条に、「この年、『通典』を買い求めて通読し、後、七、八回繙読した」〔11：752753〕とあるように、『通典』は、章炳麟が最も熟読した学術の書である。

42 『隋書・經籍志』が挙げるのは、『一字石經尚書』一卷、『三字石經尚書』九卷、『三字石經尚書』五卷である。

43 孔穎達『尚書正義』卷十一「泰誓上第一」の以下の疏を踏まえる。「梁王兼而存之、言「本有兩「泰誓、」古文「泰誓」伐紂事、聖人選為「尚書」今文「泰誓」觀兵時事、別錄之以為「周書」、此非辭也。彼偽書三篇、上篇觀兵時事、中下二篇亦伐紂時事、非盡觀兵時事也。且觀兵示弱即退、復何誓之有。設有其誓、不得同以「泰誓」為篇名也。」

44 この見方は、章炳麟の最愛の弟子であり、一九三五年に夭折した黄侃の書いた「漢唐玄学論」の完全なコピーである。ただし、王肅の作品に対する省察には、章炳麟の『古文尚書』読解の経験が反映されている。黄侃「漢唐玄学論」黄侃撰『黄侃論学雜著』中華書局、一九六四年、四八二～四八八頁、特に四八三～四八四頁を参照。